

東浩紀 / 福永信 + 法貴信也 / 海猫沢めろん /
nanakikae / 町田康 → 中島らも / 立花種久 /
斎藤美奈子 / 上野昂志 / 大杉重男 / 山本動物
/ 生田武志 / 青木純一 + 倉敷茂 / 四方田犬彦
/ 大久秀憲 / 池田雄一 / 南陀楼綾繁 + 内澤旬
子 / 中森明夫 / 内田春菊 + 川上未映子

¥0

早稲田文学部新人賞 ● 選考委員 ● 東浩紀 ● 1100元年1月10日 ● 田中先生 ● 米株地大株株母

▼昨年から選考委員をひとりだけに絞った「早稲田文学新人賞」。今回は中原昌也さんが間宮緑「牢獄詩人」を選んでくれたわけですが、今回は東浩紀さんが引き受けてくださいました。その東さんに、今日は新人賞をめぐる話をお聞きします。まず最初に、今回の選考を引き受けてくれた意図から伺えますか。

東 ● ぼくはこれまで、いわゆる文芸誌の選考委員をやっています。べつに断っていたわけじゃなくて、頼まれたことが一度もなかっただけです。ただ、文芸誌の新人賞は、選考委員が入れ替わっても、

雑誌が違って、わりと似通った基準での選別と排除のシステムになりやすいとは思っています。

そんななかで今回、『ゲーム的リアリズムの誕生』を書きライトノベルや美少女ゲームを論じているぼくが新人賞を選ばせてもらうことは、少なくとも一個べつのオプションがつくれるという意味でよいことだと思えます。

ぼくはいま、講談社で「東浩紀のゼロア力道場」、NHK出版で北田暁大さんと

「思想地図」を行っており、さまざまなかたちで若手批評家を産みだそうとしています。「ゼロアカ」なんてほんとにメチャクチャな企画だと思っけど(笑)、それでもあるていど能力のある連中が集まってきたら、そのうち一人か二人は、将来、プロの物書きになると思います。最近『ゼロ年代の想像力』を書いた宇野常寛さんにしても、早川書房の「SFマガジン」から出てきたわけで、もはや文芸誌ではない。宇野さんの出版記念トークの打ち上げに行きました

が、またメジャー手前の若手評論家の飲み会にすぎないはずなのに、ほんとに同年代やそれ以下の書き手や編集者ですごく賑わっている。あれはすごい。ああいう熱気を見ると、やっぱり、従来の文壇とは違う場面で事件が起きていると思わざるを得ないわけです。ああいう空気がしばらく続けば、かならずなにか変わっていくと思います。そして、それは少しずつ、創作の風景も変えていくでしょう。

「早稲田文学」の選考は小説が対象ですが、いま評論から出てきているそういう熱気は強く意識しています。これからは文芸誌でも、その新しい批評の流れに乗れる雑誌と乗れない雑誌がわかれていくでしょう、同じように小説にしても、たとえば「早稲田文学」の新人賞ならこういうのが通る、でも某誌にはこういうひとしか載らない、そういう差異がはつきり出てくるだろうし、またそうしていきたくて思うわけです。文壇の横で東ひとりが変なことをやってるとかいう話ではなく、それは「新しい流れ」で、それを無視するかしないかが問われているのだということをはつきり示していきたい。そのための選考委員就任だと思っています。

▼そのとき、東さんが言う「新しさ」はどのようなものですか？ もちろん、新しさなんていうのは受けとる側が規定するべきことではないし、予想もしないかたちで現れるものもあるでしょうけれど、すでに現れつつあると東さんが思うものを、あえて言うつもりです。

東●個々の作品の判断は相対的で多元的でいいと思います。選考する側も媒体も、労力や場所を提供して、それなりのコストをかけてやるわけです。だとしたら、ほかの雑誌でもデビューできるひとを、わざわざここでデビューさせる必要はない。そういう判断のなかで出てくる「新しさ」であり、特定の基準をイデオロギー的に押しださそうなんて思っています。

とはいえ、単に「インパクトがある」とか「すごい」とかではない、質的な評価は行われるわけで、そうですね、事前には言いにくいのですが、いま念頭に置いているのは、たとえば「ユリイカ」の中上健次特集でほんとに前田墨さんの対談で語られた、「異族」を引き継ぐような小説、とかくると嬉しいかなとは思っています。でも、あくまでも「たとえば」なので、あまり深刻には考えなくてください。ただ、かりに「枯木灘」みたいな小説がきても、「まあ、これはほかの新人賞でも通るでしょう」とはぼくは判断すると思えます。

▼「ユリイカ」の対談の話を補足すれば、「異族」は今日の世界あるいは文化のフラット化に構造が対応しているタイプの小説であり、「枯木灘」はたたくしく自然主義的な小説だ、という話ですね。でも、あそこでは「異族」とはタイプの違う、構造としては自然主義的なものもある。「鳳仙花」が、きわめて魅力的なキャラクターを持った小説だという話でもあったはずですが、ああいう小説が出てきたらどうします？

東●初潮前の女子がどんどんエロくなって

いく話ってこと(笑)？——そりゃもちろん、そんなの書かれちゃったら通さざるを得ないですよ！ 文学の新しい流れとはまったく関係がない基準で(笑)！

いや、まあ話を戻すと、文学ってそもそもさまざまパラダイムが同時進行しているものだから、「この文学が新しい」と言うことが無意味だということはいくらもわかります。それはまったくそうだし、そういうレッテル貼りがいかに悪影響を与えるかわかる。けれども、かといってそういうレッテルをすべて麻痺させて、「いろんな小説があるよね」ばかり言っているのも、それまたたんのダイナミズムもなくて寂しいのも事実です。

だからやっぱり、多くの作家や批評家から不興を買うことは覚悟のうえで、「こういうのが新しい文学の流れなんだ」と主張してゆくの、批評家の仕事であり媒体の仕事だと思っんです。その点で、「早稲田文学」や「ユリイカ」もそうだけれど、太田克史さんのやっている講談社BOXや「フアウスト」も偉いと思っわけです。彼は「新伝綺」とか名前をどっち上げて、「これがそが文学の最先端だ」とか言うわけだけれど、あんなのむろん言っただけですよ(笑)。でも、その「言っただけ」が、多くのひとは言えないわけです。特に文芸誌だと、ノーベル賞作家から若手新人まですべて相手にして「文芸」を代表しなければいけないわけで、そこで「最先端」なんて言葉は軽々には使えない。でも、それこそが彼らを縛ってると思っ。いろいろな世のしがらみはあるけれども、やっぱりそうあってはいけないと思います。たとえそれがワガママにすぎなくても、最先端だと思っ

「WB」のバックナンバーは
ばらっとで検索・閲覧！

早稲田文学 ばらっと

読む！めくれる！検索できる！
Web上で閲覧できる電子ブック

ばらっと

TGN 東京レコードマネジメント(株)
http://www.tgn.or.jp/trm/

ものを最先端だと言えはいいし、それでペテラン作家が手を引いたら「俺の責任だ」と言っ、それが編集長だと思っ。そういうなかで、「早稲田文学」という媒体は、「ユリイカ」と一緒に川上未映子さんを送り出したことをはじめとしてフットワークが軽い。だから、そこでしか出せない乱暴なものを出していきたいと思っます。

うぬぼれかもしれないけれど、ぼくはいま、文芸評論家としては絶対に「勝てる」という自信がある。文学は勝ち負けじゃない、とかそういう話とは別に、自分が夢想している世界は絶対になるという自信がある。だから、送っってくるひとは、なにによリ、そこに賭けてほしいです。むろん、リスクは自己責任で(笑)。

東浩紀 ● Azuma Hiroki
71年生。存在論的、郵便的『動物化するポストモダ』等で新世代の批評家、哲学者として脚光を浴び、ジャック・デリダからコミックやアニメ、さらに情報環境や現代における自由といったテーマまで広範な活動を行っている。同時に、94年のデビュー作は『ルジエーニオン論』であり、近年の『ゲーム的リアリズムの誕生』まで、その思考の底流には「貫して文学的な想像力の問題がある。現在、小説『フアントム、クオントラム』を発表中。

第23回

早稲田文学新人賞 原稿募集

- 応募作品は**未発表のもの**に限ります。
- 第23回は、選考委員との協議により募集対象を**小説のみ**といたします。
なお、評論については、本年度は随時投稿作品として受け付け、優秀作を「早稲田文学3」に掲載の予定です。
- 応募枚数は、**400字詰原稿用紙100枚程度**を上限とします。短編での応募も歓迎です。
- 応募の際は、**タイトル・筆名・本名・住所・連絡先電話番号・メールアドレス・職業・略歴**を、別紙に明記して同封してください。また、作品の1枚目に、**かならずタイトル(のみ)**を記入してください。応募原稿は、以下の書式に則ってご応募ください。
- **パソコン・ワープロ使用=A4用紙に原則35字×30行**で出力し、角をホチキス、クリップ等で留めてください。表紙または末尾に400字換算の枚数を附記してください。手書き=原稿用紙ほか任意の紙に筆記し、右上の角をホチキス、クリップ等でとじてください。
- 封筒に「**新人賞係宛**」と**朱書**のうえ、下記宛先までお送りください(かならず郵送にてご応募ください)。
〒162-0042 東京都新宿区早稲田町27 ゲストハウス早稲田町1F 早稲田文学編集室
- 受賞者には正賞として賞状と記念品、ほかに副賞10万円と選考委員の著作を授与します(佳作、奨励賞については別途定めます)。
- 応募作品は返却しませんので、手書き原稿はかならずコピーをとってお送りください。選考の経過・結果についてのお問い合わせにはお答えできません。
- 上記を満たさない作品は、選考の対象外となります。あらかじめご了承ください。



東浩紀 選考委員

**2009年
1月10日**

応募締切 **当日消印有効**

**2009年春発行予定の
「早稲田文学3」誌上** 発表

詳細は左記規定および早稲田文学サイトにて!
<http://www.bungaku.net/wasebun/>

……ところで。

「早稲田文学2」2008年晩秋^{*1}、到来。

→三年ぶりの第十次復刊、篠山紀信の表紙、川上未映子の新作、蓮實重彦への超ロング・インタビュー、ロブ=グリエ&シモンの新訳などで話題を呼んだ「早稲田文学」本誌がさらにボリュームを増してこの秋、帰ってくる。青木淳悟、東浩紀、糸山秋子、円城塔、鹿島田真希、川上未映子、福嶋亮大、ミシェル・ビュートルほか、驚きのコンテンツ満載、乞御期待！(内容は予定です)

文藝批評と小説あるいはメディアの
現在から未来をめぐって

十時開演(入場無料)

出演：
東浩紀、前田塁(+市川真人)
ほか現在交渉・調整中

日時：2008年10月(予定)

場所：都内某所

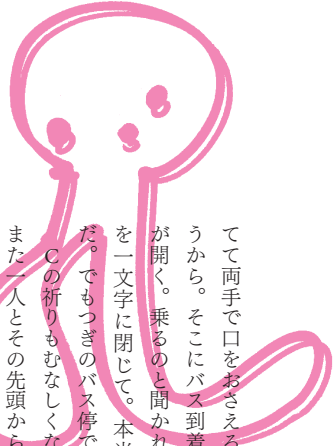
予約・問合せ・詳細はこちら
www.bungaku.net/wasebun

*1 ばん-しゅう [-シウ] 【晩秋】 1. 秋の終わり。秋の末。《季秋》「一や袖(そま)のあめ牛蒡(ごぼう)甜(ね)ぶる/蛇笏」 2. 陰暦9月の異称。(小学館「大辞泉」より)



三か所

Illustrated by 法貴信也



てて両手で口をおさえる。前歯がないのがわかってしま
うから。そこにバス到着。プシューッと音をたててドア
が開く。乗るのと聞かれてうなずく。声は出さず。口
を一文字に閉じて。本当は乗る必要なんかなかったの
だ。でもつぎのバス停でもBは降りなかった。

両足でふんづけてかためる。ジャンプする。めじるし
に小石を三つ。あくまでもさりげなく。家にあがった
ところで声をかけられる。お父さんのケイタイしらない
か。僕しらないといつて後ずさりする。くるつとまわっ
てかけた。サンダルもはかずに。汗が異様にたれて
きて手でぬぐう。すると顔が真っ黒に。横を見るとたし
かに時計店のガラス戸にどろんこの子供が一人いる。青
になったがまたくるつとまわってひきかえす。犬がほえ
る。シートというときほいにほえる。わんわん。この夏
休みのあいだずっとなつくことがなかった。かまわずい
そいでほりかえす。ない。もつとふかくほってみる。な
い。やっぱりバレてたのだ。徒勞感が襲う。それを振り
払うように手で顔をぬぐう。またまっ黒に。しかしとう
とう見つけ出す。ジャンパーの内ポケットのなかであ
る。なんという執念！ 小銭まで手に入れる。いつから
こんな悪い子になってしまったのか。バス停にならぶ
県境をこえて家に帰るつもりなのだろうか？ わずか三
つ先で終点なのだが。何はともあれ人生はじめての一人
旅。バスの到着を待ちわびる。そのとき着音音が鳴る。
Aのふくらんだポケットからなのは明らか。老眼鏡を少
しずらした視線が集まる。しかたなくごそごそやって耳
にあてる。ポケットからなんかいろいろ落ちる。

バス停でいろいろ拾う。全部自分のものである。なん
でこんなところに。ひとつひとつ拾ってポケットのなか
に。割れるものもある。立ち上がる。膝小僧に小石が
くつついたままだ。うしろから声をかけられる。一人で
バスに乗れるのか。背が高くてかっこいい男の人だ。ど
こか見たことあるような。和弘兄なかつたかとい聞か
れて思い出す。和弘のお父さん。そいうおうとしてあわ

折れ線のどれもまだ非常にみじかい。だから分析も困
難きわまる。ただしデータを新しく三か所に加え現時点
での最善を期した。とくにこの部分。いずれも数値が基
準以下でぐつすり眠っているのがわかる。よくこらえて
いるとひとまず評価できる。いつもならわんわん泣いて
親を困らせているところである。むろんまだ夜はなが
い。だから油断はできないが。四肢の複雑な運動が引き金
になる可能性もあるのだ。さて図4である。この折れ線
は勢を見ていることを示している。何度もこれまで確認
してきたとおりである。しかしこの動き。小刻みに震え
ているのがわかる。まだろくに立てないのに小さくジャン
プしているのである。途中から線が太くなっている。
ムキになっているのだ。何者かに語りかけられそれに対
して主張しているのである。ひきつづき推移を見守るべ
きである。さらに点Dに注目。ここでいったん線が途切
れる。乳歯が抜けたのだ。彼はいまふかいふかい眠りの
なかでどろくべきことに数年後の自分の姿を夢見てい
るのだ。

FILE05 1999年

●記者メモ
今回の調査のために、過去のサイトの
アーカイブを調べ、IPアドレスから
作成者の住所を割り出そうとしたこと
ろ、該当するIPは存在しなかった。

少年Aの原譜
シリーズの原譜
め海猫
りん沢

Uminezawa Meron

75年生まれ。様々な職業を経て作家に。住所不定を脱し、定住者に。各所を転々としながら
作品を発表。著書に『左巻キ式パストリゾット』(絶版)『舞-HIME』『嬢オタク流』『零式』など。

実話 ローリングサンダー！ ☆☆透明ハウザーの犯罪學☆☆

アンダーグラウンドなぼくちんたちのぼくちんですんこ

Alternative!
やらすらいていんずりりっ

ぼくちんのまちの宗教団体 その1

『聖母御堂光手大天照波動の会(笑)』

きもい やつらがいっぱいいます。
ぼくちんのいえのきんじょはすげえ なんかの道にでも、かも知れなけれど、
ぼくちんの家のやつは音かかっているから、なんかみんな僕れてる風で、
さっさと音かかっているから、さっさと音かかっているから、さっさと音かかっているから、

みかけたら殴ってみてください(笑)

せんせんにあんなに怒らないでください(笑)

で、むかしあった事件が！

『これらちの近所(笑)』

ぼくちんのいえのきんじょはすげえ なんかの道にでも、かも知れなけれど、
ぼくちんの家のやつは音かかっているから、なんかみんな僕れてる風で、
さっさと音かかっているから、さっさと音かかっているから、さっさと音かかっているから、

『これらちの近所(笑)』

一九八五年七月二十日十二時、兵庫県神戸市の小学校において水泳
のために参加していた生徒と教師合わせて三〇人が死なすとい
う事件が起きた。学校へやってきた外回りの教材高専マンが真実
に気づき連絡、すぐに警察に到着し、プールで目をくすり状
で刺死している生徒と教師を発見。その後、給食室で野球を鉄
棒で刺死していた一〇歳の少年が犯行を認め、たまたま神戸市は、殺
害と死体遺棄容疑で神戸市に住む少年Aを逮捕、自宅から洋裁、グ
グ。犯人方法、動機は不明。

インターネット時代の ネットの世界・存在する。その一部を皆さんにご紹介しよう……

現代の魔窟！

ネットの網の目を抜ける

メディアには載らない情報、かえりかえる

ネットが人口に膾炙する
のはブロードバンドが
普及した後だ。今はまだ
インターネット黎明期。
先端技術と結びついたメ
ディアは、もはやブラス
クボックスであり、それ
自体が不透明な魔法の匣
である。そうして新しい
メディアは新しい都市伝
説の温床になってゆく。
ラジオからテレビタイ
→……その日は近い。

少シデザインがエキセ
ントリックなだけで、何
の変哲もないサイトだが、
このサイトの管理人はお
そらく七七市在住だろう。
この市は昨年合併されて
名前を変えたが、以前は
城町市と呼ばれており、
数々の怪事件が起ること
で有名だった。それを
バックに読んでもらうと、
この宗教の情報が必要に
危険なアンングラを放ち
始める……

nanakikae

本好きがこうじて手製本やブックカバーまで自作してしまう「文学少女」。ブログ日記「日々是読書 (http://gosui.exblog.jp/)」が人気を博し、「彷彿月刊」で連載を持ちつつ、風呂敷に教科書や本を包んで学校や図書館通い。永遠の愛読書は『崖の館』(佐々木丸美)、『自負と偏見』(オースティン)。

まだ、私が制服を着ていたころ。スカートのポケットに手をすべりこませて、本を転がすのが気に入っていた。それは授業中や掃除の時間であったり、書架の間のことだったりする。何かの最中にほんやりと思うのは、(あ、さみしい)。さみしいと一口に言っても、たよりなく(かもしれない)なんて付け足すほどのなので、たいした理由もない。わざわざ補助鞆から本を取り出すにはおかげさで、そしてゆきとどかぬ範疇のことだった。

だからそういうとき、こっそり本に触れるのに、制服のスカートはとでもふさわしかった。指のはらでちよつと掠めるぶんには、文庫よりもハンカチの間にまぎれるくらい大きさがちよつとよかつたし、つんとすましたプリーツの間に手をすべらすのは、なぜだかひどく胸がさわいだ。ちよつとだけ、ひめごめいていて。

六年間も同じスカートをはいっていると、だんだんへなつとしてくる。折り目はやわらかく指をはじいて、色の褪せてくるスカートの紺がしんなりと目になじんで。釦はこすれて剥けてくるし、丁寧に扱っているつもりでも補助鞆のフアスナーは噛みあわなくなる。

制服は近所のおんなのこが欲しがったので、そつとお下がりに出した。一度も着崩したことのないのがひそかなじまんであった制服! さすがに襟衣はくたくたで、あげられなかった。風呂敷はもちろん、あげない。ほんとうは制服だって、あげたくなかったのだけだ。

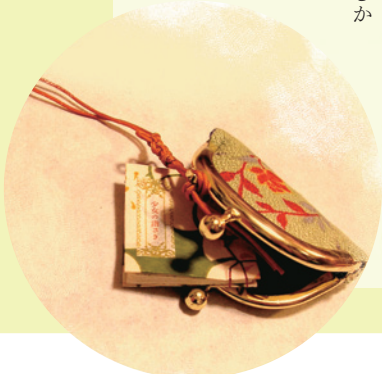
いまはもう制服もないので、しんみりと私服を着る。持っている服にはないポケットがついていなくて、手をすべらせても何も入っていないのだった。そんなときは鞆に手を入れて、きんいろのがま口をきゅつと握る。あげてしまった制服のポケットにひそませていた本が、そのなかにある。

掌にちよつとよい大きさがま口は、ふつくりとした貝を思わせる。よくよく見たらそうでもないのだけど、同じ大きさがま口が五つ六つ並んでいると、平安のお姫さまたちの貝合わせのように見えたりもする。

手に乗るくらいいいさなものが可愛らしいのは、たぶん、すべてを委ねられているという気がするから。きゅつと握りつぶしてしまえそうな気がして、恐いだった。

だから、がま口を掌に乗せるとすこし緊張する。

かたい口金をおしあげると、手になじんだ感触が、指をおしかえした。



en-taxiから生まれた単行本!

超世代文芸クオリティマガジン

◆エンタクシー バックナンバー◆
書店でご注文いただけます。各号の内容等は、本誌、または扶養社ホームページでご確認ください。

ODAIBA MOOK No.23 AUTUMN 2008

エンタクシー 23号

A4変型判 定価980円(税込)

責任編集

福田和也

坪内祐三

リリー・フランキー

9/29 発売

en-taxi

立川談春 著 ■定価1,400円(税込)

赤めだか

8万部突破!

講談社エッセイ賞受賞! 極上の青春物語。

ポンプとしてのアメリカ。とは何だろう?

アメリカ 村上春樹と 江藤淳の帰還

坪内祐三 著 ■定価1,680円(税込)

アメリカ

重松清氏激賞「これはぼくたちみんなの物語だよ」

たとえば、世界が 無数にあるとして

生田紗代 著 ■定価1,470円(税込)

天特集

アプレ・ゲール

手ぶらで帰った男たち

三島由紀夫(佐藤優) 坂口安吾(宇野常寛) 埴谷雄高(中島一夫) 平野謙(山城むつみ) 他

「特集」あの私たちが見ていたのは何だったのか

テレビドラマは

陽炎のごとく

ロングインタビュー

萩原健二(私のリアリズム演技について) 泉麻人 / 中野翠 / 鎌田敏夫 他

「小説」新連載

願わくは、鳩でいどには

六十過ぎの子育て記(杉田成道) 湯浅学 / 小野瀬雅生 / 杉作J太郎

角川春樹句会(手帖秋之巻) 正寄・高橋春男

「連載」カメラと歩く / 東京大周遊(日誌) 写真文 / 田中長徳

立川談志 / 桂秀実 / 中山康樹 他

近くて遠い町 中島らも

まだ三つか四つの頃だと思う。

オヤジに手をひかれて散歩に出た。

国鉄の線路沿いの原っぱに、顔中血まみれの男の人が倒れていた。「ウーン」と唸りながら身もだえしている。

僕は目をまんまるにしてオヤジに、これはいったい何であるか、とたずねた。

オヤジはその血まみれの人から目を僕にむけると、

「……ケンカや」

と一言こたえた。

同じ頃、やはり線路づたいをオヤジと歩いていると、踏み切りのところに人だかりがしている。

買物カゴのおばさんや、自転車を押したおじいさんなどが踏み切りを取りまいてワイワイ言っている。その人垣のあいだからパトカーのライトの点滅がこぼれている。

オヤジは人垣の中にズイッ、ズイッと割り込むと、やがてもどってきた。

「ね、何やった？ 何やった？」

とたずねる僕に、オヤジは、

「……自殺や」

と、また一言でこたえた。

僕たちは線路の近くに暮らしていた。

その国鉄の線路を毎日D51がモクモクと煙を吐きながら通った。

春先には線路ぞいの土手にツクシがいっぱい出たが、あまり取って食べる人はいなかった。

国鉄の客車のトイレから、霧のような状態になった糞便が散布されている、そのおかげで土手のまわりは草木の発育がよいのである、というのがこのあたりに住む人の見解であった。

その土手では人々は主に鶏やブタを飼っていた。

その頃はたいいていの人がニワトリを飼っていて、その世話は主に僕たち子供の役目だった。

朝、鶏小屋をあげにくくとニワトリが首から血を出して死んでいることがある。

そんなときオヤジはあまりくやしそうな顔もせず僕ら子供を見て、

「……イタチャや」

と言った。

と言うときもあつたが、どこがどう違うのかはよくわからなかった。

僕たちの住んでいる町は鉄工所の多いところで、当時「日本一の公害都市」というありがたくないお墨付きをもらっていた。

ある冬の朝に外に出てみると、納屋の上のトタンに何かまっ黒なものが三ミリほどの厚さで積もっている。

「ね、あれ、何？」

とたずねる僕に、オヤジは無感動な調子で、

「……煤煙や」

とこたえた。

休みの日にはよくオヤジは兄貴と僕を武庫川に連れていった。

泳ぐのである。

当時、もうすでにかなり汚染された川だったろうと思うが、今でも生きているところをみると致命的なほどの汚染ではなかったのだろう。

川の浅いところで泳いでいると、上流から何か黒いものが

が流れてきた。

「魚かな……」

僕が言うと、兄貴は、

「よし、僕がつかまえてやる！」

と叫んで、その流れてくるものをつかんだ。

つかんでから悲鳴をあげた。

オヤジは兄貴のつかんだものを見て、

「……ウンコや」

と言った。このときはさすがに笑っていた。

その武庫川があふれて、僕の住んでいた町が水びたしになった。床下浸水くらいですんだ僕の家あたりはまだましなほうだったようだ。

やっと水が引いたあとで庭におりてみると、土の上で何がピチピチはねている。

かなり大きな、見たこともない魚だった。

オヤジはその魚をしばらく観察していたあと顔をあげ、

「……台湾ドジョウや」

と言った。僕たち子供は、その一言でフウンと何となく納得してしまった。

先日、魚に関する本を読んでわかったのだが、あれはどうも雷魚だったようだ。

雷魚の俗名を台湾ドジョウとかどうかは知らないが、うまい魚らしくて、オヤジはどうやらその晩をいつを僕らにかくれて煮て食べたフシがある。

オヤジは何にでもそうやってポツリと、

「……○○や」

の一言で答えるクセがあつたのだろうか。

健在なのでたまに会って話したりすると、どうもそんな変なクセはないようにも思えるが、幼い頃の僕の記憶の中では、とにかくそうなのである。

「あれ、何？」

「……発電所や」

「この家、なに？」

「……火事や」

「……ここどこ？」

「……安治川や」

「この人、誰？」

「……怪傑ゾロや」

そのつどポツリポツリと落ちてくる答えを、ちようど少年探偵団のバツヂのようにたどりながら僕は僕の町、僕の住んでいる世界の有り様を確認していったのだと思う。

夏休みのある日、家の前で遊んでいると薄気味の悪い男が近づいてきた。

ものすごい出っ歯で、よく怪奇映画に出てくる下男みたいな顔をして、猫背である。

気味の悪い人だなあ、と思っているところへその男が話しかけてきた。

「ぼ……僕……。このあたりに……中島さんという家ないか……」

しゃがれた声だった。それなら僕の家で、ここだ、と答えればよいのだが、僕は一瞬とまどってしまった。

それほど奇怪な男だったのである。僕はこわごわ答えた。

「あの……、ウチやけど」

男は僕の顔をモノも言わずにジッと穴のあくほど見つめた。

「そうか……。あなた、中島さんとこの子か……」

僕は逃げだそうかどうしようか迷った。

男はゆっくりと自分の口に手をやり、そのものすごい出っ歯をガバツとむしり取った。

入れ歯だった。入れ歯をとった男は僕の顔を無表情にながめながら、

「……とうちゃんや」と言った。

このためだけにその出っ歯の入れ歯を作ったんだそうである。

出典・中島らも『恋は底ぢから』（集英社文庫）

「解説」

町田康

わからなかったことが、すっと、わかる、のは心地よい。ばらばらだったものがひとつになるのも。

その心地よさを齎すのはだれか。甘美だよ。いまでも。

ぼそつ、と言ってくれるのが、うううっ、というのは吃ってるのではない、うれしいよ。

ちゃんという、うれしいよ。ぼくは、え？ ぼくらは？

はつきりさせ、どあほ、ぼくは。最初からなにも把握していないから

そのように、ぼそつ、と言っただけでほしいと

ずっと念願していた。その、ぼそ、の精髓の部分の中島らもが書いている。

よくよく味わうべし。ま一度。

よくよく味わうべし。世界は近いと思ったら遠いんだよ。

遠いと思ったら近いんだよ。つまり、ははは、考えるべきは自分がどこにいるかということなんだよ。

そんなことを。出っ歯で。出っ歯で。山と川に区切られて。



中島らも◎ Nakajima Ramo
一九五二—二〇〇四年。コピーライター、コント作家などを経て、小説家に。うつ症状やアルコール中毒に悩まされたことも、執筆活動をはじめ、ライブ活動や定期的なトークイベントを開催するなど、多岐にわたり活動。代表作に『今夜、すべてのバーで』『ガタラの豚』など。



町田康◎ Machida Kou
62年生。リスミカルな喋り口調による文体と、執拗なまでに深く思考する作風は、真摯かつ滑稽笑いの中に鋭く「愛」と「哀」が読者を惹き付けてやまない。個性派作家の代表。代表作に『きれぎれ』（文藝春秋）『告白』（中央公論新社）、近著に『宿屋めぐり』（講談社）。

講談社◆話題の文芸書

講談社 〒112-8001 東京都文京区音羽2-12-21

いつまでも流れていく時間を描いた青春文学

長い終わりが始まる

サークルとは、世界のことだ!

山崎ナオコーラ

定価1,260円(税込)
ISBN978-4-06-214787-3



大学4年生の小笠原は、マンドリンサークルに入っている。未来になんて興味がなく、就職活動よりも人間関係よりも、趣味のマンドリンに命をかけている。そして、とても好きな人がいる。

山崎ナオコーラ◆好評既刊

著者初の書下ろし小説

論理と感性は相反しない

定価1,470円(税込) ISBN978-4-06-214588-6

「小説」の可能性を無限に拓ける全15編



眼鏡店

立花種久

どうもおかしい、眼にするものすべてが常よりも醜悪に見えると思つて、わたしは眼をしばたたく。近年、心にねじれがあつて何事も僻目に見る傾きがあるらしいことは薄々自覚していないわけではないが、それにしてもおかしい。いくら僻目とはいえ、道行く男女の顔がどれも醜悪に見えるなどということが、果たしてあるものだろうか。老女、はべつに珍しくもないが、その襲なす皺の畳まれ工合いが、いかになんでも尋常ではない。すれちがう瞬間、ひよいと眼鏡をはずして見れば、ぎよつとしたことにそこにあるのは若い女の尋常な顔だ。

ぎよつとしたとたん、いや喫驚して飛び上がりということではなく、むしろ穏やかにだがふつと眼を開く。どうやらうたた寝をしていたようだ。わたしはベンチに坐つていて、眼のまへの池はこれは僻目ということではあるまい、だれの眼にもそう映るはずだが汚れて青黒くかき濁り、とはいえ木の間から穏やかな日差しがちらちらと踊つて平安そのものというふうで、というよりなによりひと気がなく忘れられた場所という風情で静まつていることがうたた寝をさそつたのだろう。若い女といっても、器量のほうは醜悪というのではまつたくないが、あいにく格別いふほどのものではなくなどと思ひかけ、いやいやそれは現実のことではないとわたしは頭を振る。それはそうなのだが、どうも朝から眼の調子が妙なのは事実で、なるほど眼鏡のせいというのはありえないことではないと思う。なにしろ眼鏡が多すぎるのだ。遠近、ふたつの眼鏡があれば足りるはずのところ、十幾つもあるのだからまつたく異常というしかない。あるいは、もつと沢山あるかもしれない、もう何年もともに数えたことがない。もつとも、正確にはふたつではやはり不足というべきで、自宅と研究室にそれぞれふたつの計四つは必要で、

というのもしばしばついたりつかり忘れるからだ。いや、忘れるのはだいたい遠近の近のほうときまつているから、遠近の三つあれば足りるということか。

べつに眼鏡を集めることが趣味というわけではない。第一の要因は、要するに処分ということをしなからで、二十年もまえのがそこらに転がつていたりする。せめて、抽出しにしまつとかすればいいのにと自分でも思うが、それさえしないのはいい性癖なのだとしかしいようがない。それにしても、単に度が進んで買い替えるということなら十幾つなどということにはならないわけで、慎重に検眼してこれでよしと購入するのにはしばらくするとどうしてか微妙に合わないということになる。で、ついまた買うということになるし、どうもその日の調子によつて合つたり合わなかつたりということもあるようで、だからあわただしくとつかえひつかえということにもなる。時間的な制約があるし、十幾つ全部とつかえひつかえなどやつていられず、適当なところで手を打つて結局のところもう何年もびつたり合つということが絶えてないように思える。それでまたまた、今度こそなんとしてもびつたりのをやつと眼鏡店に足をむけることになつて、悪循環もいところだ。親父のやつめ、いやつまつりいつもゆく陰気な店構えの依怙地なような眼鏡店の親父のことだが、わたしの顔を見るときまつて店構えに劣らず陰気な顔を歪めてにやりとするのが不気味だし怪しくもあり、眼鏡店を変えようと思うのはいつものことなのにいざとなると結局あそこへ惹き寄せられるように足がむいてしまふのは、われながらどういふわけなのかまつたく解せない。じつをいえば、勇を鼓してほかの店で眼鏡をあつらえたことが、それでもこれまでに

何回かないわけではない。勇を鼓してというのは、店舗の明るさにといかそれ以上にわたしの眼には異人種のように映る店員たちの若さについて気後れするからで、われながら老若もきまれりと思わざるをえない。いやこの際、そんなことはまあいいとして、なんのことはない同じ結果に、しばらくするとあるいはときによつて微妙に合わないという結果におわるのだから、わざわざ勇を鼓してあつらえる甲斐がない。おまけに、長年の交誼を裏切つたような気が、なにが交誼なものかど大いに不本意ながらして、そういうとき親父のにやりに迎えられるとほらやつぱり戻つてきたといわれたような、貴方に似合ひなのはこの店しかないといわれたような気がしていよいよどうも不本意だ。

おつといけない、いかげん研究室へ戻らないと、あつという間に日が暮れてしまふ。いやべつに、戻らなかつたつてだれが心配するということもなくて、どこでなにをしようとするぞご自由にとつてもいい、ありていにして放つておかれていようというのが実状なのだが、日増しにときが経つのが早くなつてそうまごまつてもいられない。なにも時間を無駄にしているわけではなく、ここでこうしているのは研究に思いを凝らしているのだといはることはできようが、そうでないことは自分がいちばんよく知つている。ちよつと息抜きのもつりだが、ついでずるずると果けたようにぼんやりしているだけのこと、その間研究のことがちらつと頭をかすめるといふことさえなかつた。閃きということに、これまで一度も縁がなかつたとはいわないが、待ち構える姿勢というものが必要でただ漫然と待つていれば閃くというものではないし、そもそもいまは閃きに頼るといふような段階ではない。地道な積み重ねということが重要で、

だからまごごしてはいられない。もちろん、厳密な日程にしたがつてということではないが、日々着実にまとまりをなすつつあるという段階であって、いちおうの完成を見るのもそう遠い日ではないだろう。めざすは、当然ながら最終的な完成ということになるはずだが、派生的な問題もあるしとりあえずいとおうということにおいて、その完成を俟ってじっくり検討してみるつもりだ。だからそのんびり構えてもいられない。なにを研究しているかって？ いや、それは秘密秘密、だれが教えてやるものか。だれがとはいわないが、どうせ徴が生えた研究だのなんだのと、あれこれ難癖をつけるにきまつているのだ。

——眼鏡が合わなくて。

わたしはついそうこぼす。こぼさずにはいられない。研究が、もうひとつびつとしないというか、照準が甘いように思えるのはそのせいだと本当はいいたいのだが、そんなことをいえば通辞と取られかねないからそのことは口にしない。いや第一、相手は研究には縁もゆかりもない単に顔見知りというだけの、どういう素性のなにを職業とする男なのかも知らないのだから研究のことなど口にしてみてもはじまらない。わたしはもう一杯とおかわりを注文する。いいかげんにしろ、いい歳をして飲

みすぎだといってくる者など生憎ないから、自分で自分にそういつてこれが最後というそれはあらかじめの牽制のつもりだ。ちらほらと、顔見知りが見られる程度にはたしかになじみの店だが、なにも連日のように入り浸っているわけではない。いったいだれに弁解しているのだろう。いいではないか、あとは帰宅して就寝するだけの、いわば就寝へむけてのこれはさやかな楽しみというわけなのだ。なるほど、寝食を忘れてというのではないが、帰ってもなおあれこれ研究のことに気を取られてしばしば深更に及ぶというのがむしろ普通だったのはそう遠い日のことというわけではないのに、いつからかそんなこともばったりなくなつたといまさらながら気づく。いまでも、飲まずに帰宅する日のほうが多いし、となれば心にかかる研究

のことで頭を占められるといってみても、要するにただの惰性というものであつてそれがなにかを生むなどということとはまったく期待できない。それがつまりは歳を取ることなのだろう。どうにもやむをえない。なによりも気力がつづかなくなつた。考えてみれば、しばしば深更に及んだかつての日々、あれらの日々だつて眼鏡がびつたり合つたためしなど絶えてなかつたのに、一度没頭してしまえばそんなことは気にもならなかつた。眼鏡のせいにはいけない。要するに眼が緩んだとい

うことなのだ。

——ふーん、眼が緩むね、いやまあそういうこともあるかもしれないけど、それはやつぱり眼鏡のせいですよ。

——そうかな。

——絶対そうです、合わない眼鏡つてのはよくない、そこらのいまできの眼鏡屋なんて駄目ですつて、じつは寸分の狂いもなくびたりと合う眼鏡を作る名人を知ってるんです、今度紹介しますからまあ騙されたと思つてあつらえてみてください。

——いまできのつていうわけでもないんだけど。

どうせ、近くまた新しい眼鏡をとということになるにきまつているのだし、試みにその名人というのに作つてもらつてもいっこうかまわないようなものだが、そういえば以前にもたぶん同じ人物になのだろう同じような科白を聞かされたことがある気がするし、つまりはこういう場のその種のはなしの通例で紹介などということが実現するはずもないと思えば返事もついうわの空ということになるのはやむをえない。それより、気もそぞろというふうには視線はもう何度目だろうまたもやその片隅のほうへふらふらといつて、若いわけではないどころではなくどう見てももう結構な歳だろうになんとか妖艶な女の、そこだけぱつと光があつたような存在がさつきからどうにも気

生まれちやつたんだよ、俺たち。

聖王家族

まるで、
異国のコトバで
刻まれた魔道書だ。

——桜庭一樹

デビュー10周年の集大成。

「アトピアの夜の種族」「ベルカ、吠えないのか？」の

古川日出男

700年のスケールで描く、
東北をめぐる壮大な血と歴史の物語。
異形の超大作2000枚、ついに刊行！

好評発売中●定価2,730円(税込)



©カキモトジュンコ

集英社 〒101-8050 東京都千代田区一ツ橋2-5-10

になつてしかたがない。いやいや、それも眼鏡のせいであつたの眼にそう映るといふだけのことにちがひなく、眼鏡が合わないといふことがそんなふうになつて作用することも稀にないわけではない。いい歳をして、とわれながら思わないわけではないが、ただひそかに眺めるだけならばつかまうまい。その手の女がどういふ種類の興味にしろわたしに興味を示すなどといふことはありそうもないぐらゐのことは、もとより承知のうへだ。

次の瞬間、あつとろたえてわたしは視線をそらし、いつてもそらしたのは女からではなく、視線がたまたまほんの少しふらついた拍子に女のすぐ近くの席の男の顔を捉え、一瞬のことだしたしかといふわけではないがにやりとしたと思つたその男からだつた。わたしのそれはさりげない視線であつて、なにも食入るようにつめていたわけではなく、それに少々の厚顔はそれこそ歳の甲といふもので普通ならそんなことで動揺するはずもないのに、われにもなくついろたえることになつたのは例のあの眼鏡店の店主ではないかとつさに思つたからだ。

うかつなことに、この店とあの眼鏡店はわたしのうちでまるで結びつかず、まったく別々の界限にあるように思ひ込んでいたのはどういふ錯覚なのか、考えてみればここからそう遠いわけではなく十五分も歩けば辿りつけるはずだから、あの店主がここに姿を現わしたとしてもさほど不思議ではない。視線をそらしてもなお動揺はつづいて、あの店主にちがひないとほとんど信じかけたのはたぶんそのせいなのだが、やがていくらか冷静になつて仮にあの店主だとしてもなにもうろたえる理由などさらさなく、もしそうならいってばんと肩のひとも叩いてついでに眼鏡が合わない苦情をいってほしいと思つてく。というの、考えてみればこれまでその種のことを申し述べたことではないから、単に眼鏡を新調するの趣味とするへんなご仁と思われているかもしれず、なんだそれならそうといつてくれればよかつたのになつたことに、びつたりの眼鏡ねまかせてくださいとかなんとかいうことになつて案外あっさり解決しないともかぎらないと考へ、となると逆に場ちがひといふかいかにもこんな店には似合はずあの店主だなんてどうもありそうもないと思つてきた。というわけで今度は少々大胆に、にやりとしたいならしてみろとばかりその男の顔をわたしは見つめ、にやりとするどころか気づきさえしないあるいは気づかないふりなのかいづれにしろその顔は、似ているといへば似ていないこと

もないがやはりちがうようでもありといつてそう断定もできず

となにやら煩悶するほどにいいよわからなくなる。莫迦迦迦しい、要するに酔つているのであつてもう帰ろうと立ち上がった拍子に、大きくよろめきかかる。

——大丈夫ですか？

——うん、いやありがとう、大丈夫。

わたしは声をかけてきたそのだれかに手を振る。

——大丈夫ですか？ いや、余計なことかもしれないが、お歳を召していらつしやるのに、少々すぎすぎです。

やれやれ、さつきまく振り切つたつもりだつたのに、どうもしつこいやつだ。そんなことは重々承知している。まったく余計なことだ。このとおり、ちゃんと歩けるとつい歩くことを意識したせいで、かえつて足どりが覚束なくなつたようだ。

——ほらほら、だからいわないこつちやない、まあとにかくかけてください。

かけろだと？ なるほど、往來を歩いているつもりだつたのに、どこやらの室内にいろようだとよくよく見まわしてみれば、迷路じみた商店街の奥まった一劃に紛れるようにひっそりとしたずむ、あのおなじみの眼鏡店の陰気きまりない店舗のなかではないか。いや、おなじみといふほどに頻りに訪れているわけではないのに、たしかにそういう気がしてこのいままはじめて気がついたので、わたしの研究室とよく似ているからだ。昼なお暗いといふような店舗だが、夜のこの時刻ともなればなおさらに陰々としていふことが、似ているといふ印象を余計強めていふことはあるかもしれない。それとも、あるいはひよつとして研究室にいろのかもしれないといふ気もしてくるのだが、まあどつちでもいい。それより、ちよつどいい機会だから、この際苦情を申し述べておこう。

——びつたりの眼鏡？ いやいや、わたしはそんなものには興味ありません、そのことはいつかも申し上げたはずですし、先生もよくご存じのことでしょう。

——そうだったらどうか。

——これだからなあ、どうも困るんだよなあ、すぐ酔つぱらつちやつて。いつときまきすけど、例のすべてが醜悪に見えるといふやつ、あれも先生のご注文ですからね。困つたな、悪酔いしない眼鏡とかね、そういうのが作ればいいんですけど、なにぶんにも未熟なものですから。可能性としては、たぶん酒が嫌になる眼鏡といふほうが見込みがありそうですけど、それ

じゃあ先生のお気に召さないだろうし。いや、いろいろ研究はしているんですけどね、もともとそういう方面は得意じゃないし、あいすいません。

研究だ？ けしからん、ひとのテーマを勝手にと一瞬短絡的に考えかけるが、いやいやもちろんわたしの研究はそんなテーマではなく、そうではなく徹のいやちがう待てよなんの研究だつたか憶い出せない。老筆のきわみだ。いやいや、憶い出せないのは酔つているからにきまつていて、とはいふものの気になるからこの際なんとか憶い出そうとわたしは虚空を覗み、ところがその虚空のはずの空間にさっきの例のいい歳だろうに妙に妖艶な女がいて、いかにも嬌然たる典型といふふうな造りものめいた笑みを浮かべる。おいおい、いやべつに神聖な研究室などといふつもりはないし、まして眼鏡店の店舗だとすれば口を挟む筋合いもないようなものだが、どつちにしろこれ見よがしの笑みなんて場ちがひにすぎるといふものだ。思いついて、眼鏡をはずしてみると女の姿は忽然と消え、かけるとまたまた現われて同じ嬌然のみごとくコピーのくりかえしだ。

——ええ、ほら歳のせいかわい女性性は閉口だと、このあいだおつしやつていたから。

——そういえば、そういうようなことをあるいはいつたかもしれない、いやたぶんいつたのだからといふ気がする。

——そうそう、いつだつたかご注文の物忘れ防止というの、あれもやつぱりちよつと無理なようです、所詮眼鏡はただの眼鏡ですから。

わたしはうなずく。その拍子に、眼鏡店の店舗でもわたしの研究室でもなく、自宅にいろのだといふことに突然気づく。こうして見ると、いづれも紛らわしいほどによく似ていると気づかされるが、自宅であることは間違いない。それはそうだが、あれからまっすぐ自宅へ帰つてさつさとベッドに潜り込み、すなわちわたしはいま夢見ているといふわけなのだ。とはいへ、夢から醒めてみたところで、さほどちがう現実があるわけではない。早速、あすにもあの眼鏡店にいつて、例によつて親父に難題を吹つけてやろう、悪酔いしない眼鏡をなにがなんでも作れと。

立花種久 ● Tachibana Tanehisa

47年生。息が長く端正かつ飄飄とした文章で、リアルと幻想の入り混じつた世界を描く。「電気女」「不明の時間」「大蛇鰐」(以上、パロル舎)など、数多くの作品を発表している。

旧作異聞 15



斎藤美奈子◎ Saito Mirako
56年生。文芸評論家。94年『妊娠小説』で評論活動をはじめ、他の著書に『たまには時事ネタ』『それってどうなの主義』など。



『婦系図』（新潮文庫）

泉鏡花「婦系図」。「ふけいず」ではなく「おんなけいず」と読む。初出は一九〇七（明治四十年）の「やまと新聞」の連載だった。

「切れるの別れるのって、そんな事は、芸者の時に云うものよ。……私にや死ねと云って下さい。」「婦系図」の中の「湯島の白梅」の場に登場する有名な台詞である。もともとそれは、あくまでも柳川春葉の脚色による新派劇や映画の話。原作にそんな台詞はない。主役の男女は湯島に赴きませず、それどころか小説には男が女に別れを切り出す場面もないのである。

とはいえ、虚心地懐に読んでみると、本欄でこれまで読んできた明治文学のエッセンスが詰まっております、これはこれで興味深い。

主人公の早瀬主税は、恩師・酒井俊蔵の下でドイツ語を修めた陸軍参謀本部の翻訳官。最初に二人の女性が登場する。まずお蔭。もとはといえば柳橋の芸妓だが、いまは早瀬と所帯をもっている。が、二人の仲は恩師・酒井には内証である。もうひとりはお蔭の姉。酒井の娘で、早瀬とは兄妹のように育った仲だ。才色兼備でお嬢様育ち。女学校の生徒である。

芸妓と女学生。明治文学が好む二大ヒロイン像といえるだろう。物語はそんな妙子の縁談話からはじまる。相手は早瀬の友人・河野英吉だが、静岡で病院を営む名家の一族である河野とその母は、妙子の「遺伝」や「肺病」や「品行」を気にし、早瀬に妙子の身元調査を依頼する。

早瀬は河野一家の無礼なふるまいが我慢ならず、断固として拒否するが、その早瀬もまたお蔭との関係が酒井にバレ、俺を乗せてるか、婦を乗せてるか」と迫られて、「婦を乗せてます。先生」と誓うのだ。

かくして早瀬とお蔭は別れさせられ、さらに早瀬は時ならぬスリ事件に巻き込まれ、職場をクビになって、東京を去ることになる。

と、ここまでが前編。ま、凡庸なメロドラマではある。しかしながら、お芝居とちがって小説では、早瀬とお蔭の関係はむしろ脇筋に近いのだ。話題の中心は妙子の縁談で、いったいこの早瀬という男は、お蔭と妙子のどちらが大切なのかもハッキリしない。

後編に入ると、さらに話は横へとズレていく。故郷の静岡に帰ってドイツ語の塾を開いた早瀬は、あるうことかまず河野の妹（理学士夫人の菅子）とねんごろになり、次には河野の姉（病院長夫人の道子）に手を出し、一方、早瀬と別れたお蔭は病に臥せて、とうとう死んでしまうのだ。

それと同時に明らかになる妙子の出生の秘密（彼女の実母はお蔭の先輩格の芸妓だった）。道子の出生の秘密（彼女は河野の母が馬丁と通じて生まれた子だった）。そして暴かれる早瀬の出自の秘密（彼は酒井に拾われて学士にまでなったが、もとは「隼の力」と呼ばれるスリの一味だった）。

悲恋の物語だと思つて読むと肩すかしにあう。新潮文庫版の解説で四方田犬彦が（全編に流れているのは階級の問題）だと指摘しているように、『婦系図』はそう、早瀬主税という悪漢を主役にした一種のピカレスク・ロマンなのだ。

問題はしかし、なぜこれが「希代のメロドラマ」に改編され、改編されたほうの物語が人口に膾炙したか、だろう。

「婦系図」というくらいで、ここには明治文学をたびたび彩ってきた何種類もの女たちが登場する。妙子は『浮雲』のお勢以来の「女学生の系譜」に乗っており、一方のお蔭は『当世書生気質』の田の次以来の「芸妓の系譜」を継いでいる。早瀬が妙子に忠誠を尽くすあたりは日本文学お得意の「告白できない男たち」を思い出させるし、お蔭が病で死ぬくあたりは、これまた日本文学お得意の「相思相愛になると女は死ぬ」という法則にのっとっている。

が、そこで終わらなかつたのが、『婦系図』の特異なところ（換言すれば理解されにくいところ）だったとすべきだろう。後編に登場する菅子と道子は中産階級の人妻で、二人とも早瀬と通じたあげく、最後には非業の死をとげる。河野の母も含め、名家の令夫人が次々と不義密通をはたらくこの展開！ 大学出のインテリぶつても、名家の奥様ぶつても、一皮むけば男も女もこんなものさ、紳士淑女がなんぼのもんじゃない、とでも泉鏡花はいいたげだ。

ウジウジした男が目立つ中、出自が怪しく、女たちを次々手玉にとる早瀬主税は近代日本文学には珍しいタイプの男である。結末近く、彼は突然べらんめえ調になって、河野家の当主相手に長舌舌をふるう。

「凡そ世の中に、家の為、女の児を親勝手に縁附けるほど惨たらしい事はねえ。（略）娘が惚れた男に添わせりや、誓い味噌漉を提げたつて、玉の冠を被つたよりは嬉しがるの知られえのか。傍の目からは筵と見えても、当人には綾錦だ。亭主は、おい、親のものじゃ無えんだよ」

恋愛至上主義者風の早瀬のこの主張を真に受けければ、『婦系図』は恋愛を抑圧する家制度を告発した小説ということになる。だがしかし、いかに酒井家への恩義と河野家への復讐のためとはいえ、この早瀬つちゆう男も、ずいぶん都合のよい恋愛至上主義者ではないか？

女学生の妙子にはプラトニックな愛。芸妓上がりのお蔭には「味噌漉を提げた」女房の役目。そして人妻である菅子と道子には官能。精神・生活・肉体と、性質の異なる「恋愛」を別々の女に分担させているわけで、思えばいい気なものである。こんな女たらしの色男を（嫉妬半分で）読者は見たくなかつた。不貞の女たちも（怖いので）見たくなかつた。だから「湯島の白梅」つてな安全でわかりやすい悲恋のほうに、劇作者と世間の目はなびいたのではなかつたか。

後編のドロドロの愛憎劇は、だげとお蔭の帯ドラマにピッタリ。あくびの出さうな悲恋などより、ずっと視聴率が取れること請け合いだ！

日本ミステリー小説探検期の名探偵、法医学博士 呉田秀雄、100年の時を超えて初の完全集結！

探偵奇譚

呉田博士

三津木春影

末國善己編



◎ 三津木春影「呉田博士とその時代」
江戸川乱歩、横溝史子、野村胡堂らが愛読した、オースティンフリーマン・フリン・ダーク博士シリーズ。コナン・ドイル・シャーロック・ホームズシリーズの鮮烈な翻案（限定1000部）*7140円

- 【限定1000部シリーズ好評既刊】
- 野村胡堂 探偵小説全集 *7140円
 - 国枝史郎 歴史小説傑作選 *7140円
 - 国枝史郎 伝奇短篇小説集成 全二巻 *各7140円
 - 国枝史郎 伝奇浪漫小説集成 *7140円

文豪大テュマの知られざる初期作品 本邦初訳！

メアリー！ スチュアート

アレクサンデル・テュマ 田房直子訳 *2520円
三度の不幸な結婚とたび重なる政争、十九年に及ぶ監禁生活の結果に、エリザベス二世に処刑されたスコットランド女王メアリー。悲劇の運命とカトリックの教義に殉じた、孤高の生死。



作品社 東京都千代田区飯田橋2-7-4/ 価税込 TEL03(3262)9753 FAX03(3262)9757

上野昂志の

副校長業務連絡
戯言人生

⑧ 高田馬場の路地裏でドキュメンタリーを見る

高田馬場駅から、明治通り沿いにあるジャナ専（日本ジャーナリスト専門学校）に行くのには、幾つかのルートがあるが、神田川沿いの道がいつものように整備される前に、いつも通っていた道がある。明治通りの崖下に向かう一本道で、材木屋があったり、近所の人しか行かないような小さな飲み屋があったりするのだが、九月アタマの炎天下の午後に向かったのは、そこからさらに一本入った路地の突き当たりである。突き当たりといっても行き止まりというわけではなく、いまだき珍しい、その分年季の入った木の門扉を閉じた家の前には、左右に抜ける道があり、右側は、ちよつとした石段になっている。そこも何度か歩いたことはあるのだが、案内の地図がなければ、そんな所にそんなスペースがあるとは到底思わない、その石段の脇に、「市民メディアセンター MeaR（メディアール）」があった。

もつとも、「メディア教育の持続的で本格的な実践」や「情報発信の支援」を主な活動目的とするこの場がスタートしたのは、六月頃からということだから、わたしが今日まで、こんな所に、こんな空間があると知らなかったのも不思議はない。だが、案内のパンフレットには、十月から、「映像メディアの解体新書」をはじめとする講座が目白押しに並んでいるから、活発になっていくのだろう。わたしが、ここに来たのは、ジャナ専の卒業生から、「わたしの連れ合い」が、こんなドキュメンタリーを撮ったので見てください、という手紙をもらったからである。連れ合いの名は土屋トカチ。彼が監督・撮影・編集した作品が「フツの仕事をしたい」である。

この作品の主人公は、セメントを、工場やサービスステーションから、生コンクリート製造工場へ運ぶ仕事をしている三十六歳のセメント輸送運転手。彼は、有限会社東都運輸というところで仕事をしていたが、土屋トカチ君が、彼に会う二〇〇六年の四月までは、月に五五二時間も働いていたという。これは、映画にも出てくるが、一カ月三〇日とすると、全部で七二〇時間である。五五二時間働いていたとすると、残りは一六八時間で、仕事から解放されるのは、一日あたり五・六時間だ。そこからさらに、通勤に要する時間を引くと、またもに寝られる時間は、？というしかない。しかも、給料は完全歩合制だから、セメントを運ばない限りもらえない。ところが、彼、皆倉信和さんは、この業界では、それがフツだと思っていたというのだ。

そんな彼が、さすがに、これじゃタマラン、と「連帯ユニオン」（全日本建設運輸連帯労働組合）に駆け込むのは、その歩合制の、歩合の比率を一方的に下げると通告されたときである。

映画が、俄然面白くなるのは、ここからである。会社関係者という強面の男が出てきて、皆倉さんに、ユニオンをやめるよう強要するのだ。監督自身のナレーションでは、その会社関係者なる男（正体は運転手派遣のブローカーらしいが）に連れられてユニオンの事務所に来て、組合を辞めますというときの皆倉さんの印象は、いかにも弱々しそうだつたという。

ところが、いったんは組合を脱退するといった彼だが、すぐに、それを撤回すると会社に通告する。このあたり、ユニオンのバックアップがあつてのことではあるが、そこから、くだんの会社関係者による執拗な攻勢が始まり、ついには、皆倉さんの母の葬儀の場での暴力沙汰にまで発展する。このあ

ハイブリッド・クリティック
お立ち台 15

大杉重男

私はこの連載の第二回で、バイロイト音楽祭で偶然小泉首相（当時）を目撃した話を書いた（バイロイトで見た「小泉劇場」）。特に書きたかったのは、小泉が貴賓席から立ち上がって聴衆に手を振ったのに、なぜブライイングが起きたことである。その理由は長く私の中で謎であり、以前このコラムで紹介した時も分つていなかったのだが、今年小泉が出した『音楽遍歴』という本を読んで、やつとその謎が解けた思いがした。

この本は日経新聞の記者が小泉にインタビューしたものをまとめた薄い本で、ヴァイオリンを習ったことからクラシックの中でもヴァイオリン音楽に特に興味を持ったことなど、小泉の性格を知る上で参考になる本だが（小泉がピアノを習っていたらキャラクターが変わっていたかもしれない）、その中にバイロイトの思い出が書かれている。それによれば、小泉はシュレーダー首相（当時）の招待で一緒にバイロイトに行ったのだが、会場に入った後、まだ時間があるからと言われて二階正面のバルコニーに出て手を振った。ところがシュレーダーは出てこないで後ろに座っている。小泉がなぜ出ないのかと聞くと、「ヒトラーも同じ場所に立っていた」と答えたと言う。

本文につけられた注釈は、シュレーダーは左派の社会民主党であり、この振舞いは「ドイツ首相としてではなく、シュレーダー個人のこだわりではないか」と語っているが、他のドイツの首相がこの「ヒトラーお立ち台」に立って手を振ったことがあるのかどうかはこの記述だけでは分らない。私は劇場の中に入っていたので小泉がバルコニーで手を振っていたのは見ていないが、その後劇場の中でもう一度小泉が立って聴衆に挨拶した時拍手と共にブライイングが起きたのが、この「お立ち台」で手を振ったことに対するものであるとすれば納得できる。ちなみにこの本にはブライイングがあつたことは一言も書かれていない。小泉は気がつかなかったのかもしれないが、私だけではない、同行していた他の日本人が「失礼だ」と眉をひそめていたのでよく覚えていた。

この日の演目「タンホイザー」を指揮していたのがネオナチに親近感を持っていると噂されるティレマンだったというのも出来過ぎているが（演奏そのものは予想とは異なり優等生的に端正で美しいものだった）、しかしこのエピソードは小泉の「鈍感力」の内実を物語るものではない。小泉がヒトラーにつながる危険な存在だったことの現れとは読めない。実際ヒトラーと小泉のほとんど唯一の共通点は、『音楽遍歴』で語られるようにワグナーの初期のオペラ『リエンツィ』を好んでいることだが、このオペラの内容（それに付けられた音楽は、主役たちの声が入声部に偏っていてワグナーらしいバリトンやバスの歌が貧弱であることを除けば、既に『さまよえるオランダ人』以降につながる充実したものであり、このオペラが現在あまり上演されないのはおそらくヒトラーが好んでいたことによるところが大きい）はまた両者の隔たりをも示している。すなわち「リエンツィ」は十四世紀ローマの政治家リエンツィが古代ローマの民主政の復活をスローガンに民衆の支持を集めて貴族たちを打倒しようとするが、貴族と組んだローマ教皇から破門されることで支持を失い破滅する物語である。つまりそれは、ポピュリズムによ

Published by 大日方純夫
 Edited by 芳川泰久 (Editor in Chief)
 木村安希子 青山南
 下田桃子 江中直紀
 武川葉月 貝澤哉
 寺井ゆみ 十重田裕一
 近藤景亮 三田誠広
 西條弓子 山本浩司
 窪木竜也
 朴文順 市川真人
 (Concept & Direction)
 Design 奥定泰之 momoko
 Photograph 高橋万里子 (photographers' gallery) p20.24
 田口まき (Mami) p17
 Special thanks to 青木誠也 山崎貴之

編集・発行 早稲田文学会/早稲田文学編集室
 162-0042 東京都新宿区早稲田町 27-1F
 TEL/FAX 03-3200-7960
 Mail wbinfo@bungaku.net
 印刷 凸版印刷株式会社
 112-8531 東京都文京区水道 1-3-3
 TEL 03-5840-4845 FAX 03-5840-1676
 http://www.toppan.co.jp/

▼校了前すっきり体調を崩し、今号グラの進行はほぼ全部、今春この編集室に拾ってきた、もと教え子・窪木竜也26歳が管理してくれました。学生達もそうだけど、よく働く若者がいるっていいなあ。来年の今頃には彼が1から編んだ「ワセパン」クボキ ver.(?)もお届けできるはず。ってことでほくは、「ばちんこCR北斗の拳」新装に備えて寝……いや、隠し球企画アリの本誌「2」に新WBやP.3告知のシンガ、ワセパン「二●動」化計画と単行本など、ちゃんと準備してます。読者の事情で「2」刊行が遅れるのはご愛嬌。進行回復は彼のがんばり次第。なあクボキ？ (ic)
 ▼寝たきり老人を介護するような気持ちで、編集室にやってきました。今年も年頭から早稲田社と新風舎の倒産、7月末の洋版倒産、相次ぐ雑誌の休刊……など、不景気っぷりが止まらない。また、この狭い業界を離れたところで、日々苦しんでいる人がいることは周知のとおり。そうした状況下で生まれる小説のありようを、社会を批評する、青木純一+倉敷茂氏の「アモイで、考えてみた」が、今号より始まりました。
 ▼一方で目を別のところへ向けるなら、日進月歩のいきおいで開発される情報環境のもと、同年代のひとびとが、文芸・批評界隈にかぎらず、思い思いのメディアで、以前なら考えつかなかったような仕方活動を始めつつある。これは、巻頭の東浩紀氏の言葉にあるとおり。そして何より第23回早稲田文学新人賞、新たな書き手の誕生を切に願います。
 ▼こうした状況にあって、新しい流れとともに/また違うかたちで、「WB」「早稲田文学」は文芸・批評の回路をつなげていく。とりあえず、ムサイ男ほっかの文芸・批評界ってどうよ？ というところから始めます。乞御期待。ってことで学生スタッフをおやつで懐柔しようとして失敗。(K)
 ▼アラフォーとアラサーのムサイ男があれこれうさいます。(学生/匿名希望)
 ▼日本語による文芸・哲学・芸術表現の普及をめざす「WB」では、主旨に賛同・応援してくださる個人や企業の皆様からの広告出稿や配布場所提供等のご助力を求めています(広告収入は部数と配布箇所拡大に用いられます)。関心を持って頂けた方は小誌編集室までご一報頂ければ幸いです。

WBは全国42都道府県+海外4都市で配布中!

映画としては、輸送業務という労働そのものが、運転手にどれほどの負荷をおわせるかが十分描かれていないという不満は残る。ただ、これは、輸送を典型として、現代の流通やサービスに関わるほとんどの労働は「見えない労働」だから、その点をいかに可視化するかが今後の課題であろう。その点で土本典昭の『ある機関助手』(63)や『ドキュメント路上』(64)が参考になる。あ



上野昂志 ● Ueno Kouichi
 41年生。批評家。短く切れ味のよい批評で映画・写真・文学・社会を捉え続けてい。主著『戦後60年』など。http://www.amudesu.co.jp/taasagere/

そういう意味で、これは、最近では珍しい労働者の勝利を描いた映画なのだ。と、いつて、むしろんかつての皆倉氏と同じような労働を強いられている人たちはゴマンとおり、また、東都運輸ほど悪質ではなくとも、労働者に苛酷な労働を押しつけなければ立ちゆかないという中小零細企業は、他の業界にも、掃いて捨てるほどあるのだから、問題は依然として残っているというしかない。ただ、個別の局面では、こうして、とりあえずの勝利を得られるということを明らかにしたという点で、このドキュメンタリーには教育的な効果がある。

「ポレポレ東中野で公開されたときに、劇場でご覧下さい。」
 このあと、ユニオンは、東都運輸に仕事を止めている輸送会社に抗議行動を仕掛け、ラチがあかないとみると、セメントを製造販売している住友大阪セメントに対して、抗議行動を展開するのだが、そこで面白いのは、この会社の前の通りに仮のスクリーンを立てて、それまでの経緯などを撮った記録映像を上映するところである。結局、住友大阪セメントは、この攻勢に折れて、運輸会社に教育的指導(?)をし、その結果、孫請けの東都運輸は解散、皆倉氏は、新会社で、「フツ」の業務形態でセメント輸送をすることになる。つまり、彼と連帯ユニオンは勝ったのである。

日本において「リエンツィ」のローマ教皇に対応するのは天皇である。小泉が天皇制に手をつけようとした例としてまず挙げられるのは、皇位継承権を女性にも認めさせようとしたことだが、秋篠宮家に男子が産まれたためにあつさりとして挫折した。小泉が首相だった頃、そのポピュリズム的手法による強引な政権運営と靖国神社参拝に象徴されるナショナリズム的振舞いに批判が集まったが、天皇制というリミッターがある限り、良くも悪くも日本に独裁者が登場することはないだろう。どうすればこのリミッターは外れるのか、あるいは外すべきなのか。いずれにしろ小泉は独裁者の演技をして見せただけであり、そしてそれを支持する人々はそれが分っていたから支持したのだし、批判する人々もそれが本当は危険ではないことが分っていたから安心して危険だと騒いでいただけに見える。「真実のうそ」は感動的だ」という言葉が「音楽遍歴」の帯にあるが、極めて冷徹な意識的マキャベリストとして演技を貫徹した小泉は、論壇・文壇の右や左の凡百の小ポピュリストたちよりは何枚も役者が上であった。あ

って世俗的権力を握りのし上がった独裁者が既成勢力を駆除しようとして最終的に宗教的権威の壁にぶつかって挫折する物語として読み換えることができるが、ここにはワググナーが見聞した七月革命の挫折に対する批評が込められていると見ることができ、ここにはワググナーが見聞したナグナーが「タンホイザー」「ローエングリン」から二月革命の挫折経験を経て「パルシファル」に至る道において、この宗教的権威への屈服・帰依へと転向して行く(ニーツェはそれを激しく批判した)のに対して、ヒトラーは「リエンツィ」を反面教師とすることで独裁者としての自己イメージを固めて行く。

「リエンツィ」のローマ教皇に対応するのは天皇である。小泉が天皇制に手をつけようとした例としてまず挙げられるのは、皇位継承権を女性にも認めさせようとしたことだが、秋篠宮家に男子が産まれたためにあつさりとして挫折した。小泉が首相だった頃、そのポピュリズム的手法による強引な政権運営と靖国神社参拝に象徴されるナショナリズム的振舞いに批判が集まったが、天皇制というリミッターがある限り、良くも悪くも日本に独裁者が登場することはないだろう。どうすればこのリミッターは外れるのか、あるいは外すべきなのか。いずれにしろ小泉は独裁者の演技をして見せただけであり、そしてそれを支持する人々はそれが分っていたから支持したのだし、批判する人々もそれが本当は危険ではないことが分っていたから安心して危険だと騒いでいただけに見える。「真実のうそ」は感動的だ」という言葉が「音楽遍歴」の帯にあるが、極めて冷徹な意識的マキャベリストとして演技を貫徹した小泉は、論壇・文壇の右や左の凡百の小ポピュリストたちよりは何枚も役者が上であった。あ



大杉重男 ● Ougi Shingo
 65年生。主要著書『小説家の起源』徳田秋声論『ペンチ漱石―固有名批判』。

街でも携帯でも読める文学

livedoor[®]

ケータイlivedoorでは
 オリジナル小説を無料で掲載中!
 WBコンテンツをケータイで!

QRコードでアクセスするが「nv@ld.tv」宛に空メールを送ると、折り返しURLをメールで送ります。

How to access?

動物⁶徘徊す

山本動物

Yamamoto Doubutsu

1973年東京都生まれ。85年頃ふとものごころがつく。
以来ずっと動物。それ以前のことはよくわかりません。

思えば流行り物に弱かった。しかし、別に流行を意識したことなど一度もないのだ。ただ、なぜか気が付くと空気というか流れのような何かにいつの間にか押し流されているのである。見たことも聞いたこともないものにかに抵抗することが可能だろうか。見たことも聞いたこともない証拠に、その時々に乗った流行物が何一つとして思い出せない。ただ「ああまた流された」という記憶だけが残っているのみである。このままではいつうっかりと忘却の河すらも越えていそうである。それは流石に不可。不可であるということで、今回は忘却の河に辿りつく前に少しばかり書き残しておこうと思うのである。というわけで『崖の上のポニョ』と『よつぱと!』の話である。伊藤剛のキャラ／キャラクター理論から導き出されるところによると、キャラとは記憶＝歴史を持たない存在である。記憶＝歴史＝物語を持ち、固有の人格に相応しいくっきりとした輪郭を有するキャラクターに対し、それを持たないキャラは代わりに無垢と無限の潜在的可能性を持つ。そして、この夏の話題をさらった『ポニョ』と既刊8巻の累計が五五〇万部に達する人気作『よつぱと!』が共に、キャラがいかに記憶＝歴史を持ちうるか、つまりキャラがいかにしてキャラクターになるのかという試みをしているという点は、現代の文化状況を考える上で微候的なのではないかと思う。「宗介、すぎ」という情動をそのまま擬人化したようなポニョは、その潜在力を最大限解放し、表現形をさまざま変えながら、最終的に人間になること＝約束を交わすこと＝結婚することを目指す。一方、幼児であり外国人という意味で、ルソーのタブラ・ラサであるよつぱは、日々の出来事、周囲の環境、彼女を取り巻く人々etc.との細やかなインタラクションを通して、自身の可能性を固定させ、やはり人間になっていく(だろう)。「ポニョ」はそれを二時間という枠で見せるために、全体としては「(成長)物語」的に展開され、アニメという形式を最大限活かして情動の自由に可変する力能を見つけたが、さしあたってそのような枠の制限のない『よつぱと!』は、実際の子どもの成長のような物

語なき物語、シームレスで分節化されない成長なき成長をきわめてマイクロなところで丹念に見せようとしている。そして、流行り物つながりということで言えば、『初音ミク』は『ポニョ』『よつぱと!』が、とはいえあくまでコンテンツのレベルで行っていることを、もっとシステムやインフラというレベルで行っていると言えるだろう。キャラからキャラクターへという移行の物語を描くのではなく、キャラとキャラクターを異なる位相として扱う、しかし前者から後者が派生するという順序は保持するという意味で。もちろん、キャラ／キャラクターに発展段階や優位劣位の区別などが無いことは言うまでもない。しかし、大きな流れとして、戦後(それ自体が大きな物語でもあった)という時空において長らく支配的だったのはやはり重厚な物語＝キャラクターであり、その呪縛、重みからいかに逃れ、キャラの自由、軽さを獲得するかということが八〇年前後、ニューウェーブのあたりより指向されてきたことも間違いないだろう。それがいつしか反転し、いまやキャラ＝キャラクターという流れのほうが国民的な人気を獲得しているということは何を意味するのか。まず、単なる物語回帰ではないということは言えるだろう。もはや単一の、強く大きな「物語」には戻れないというところから、各々の苦闘は始まっているのだから。同じ道でも行きと帰りでまったく異なる風景になるのだし。先に結論だけ言えば、彼らの試みはキャラ／キャラクターの分割を統合し、言うなれば「キャラ」クターの統一理論を模索しているものだと思う(伊藤剛ももとよりそれをやっているが)。言い換えると、単一であるがゆえに強く大きかった「物語」の強度をそのまま複数化させるための基礎理論の構築が目指されているのである。それはおそらく「ゼロ年代の想像力」の最終目標でもあり、ここで当然狙上にあがるべき数多の作品がそれにいかに成功／失敗しているかを述べていきたいのだが、紙幅が尽きた。忘却の河は意外と近い。♪

生田武志 プアプア批評



Ikuta Takeshi

64年生。野宿者支援活動。著書『野宿者襲撃論』。連載タイトルは鈴木志郎康の「プアプア詩」に倣いました。ただし、ほくのは「poor」のことです。

こうした光景をもう一度見るとは思わなかった。警察署を囲む機動隊に向かって、数百人の労働者や若者が空きビンや自転車を投げつけ、投石を繰り返す。機動隊は消火剤を撒いて労働者を追い散らし、2台の放水車が集まった群衆に向かって放水を始めた。労働者は自転車を路上に並べてバリケードを作って対抗し、機動隊に体当たりし、もみあい、消火器を投げ込み、ダンボールを満載したリヤカーで機動隊めがけて突撃を繰り返す……。

今年6月13日から6日間、釜ヶ崎(大阪市西成区)で暴動が起こった。きっかけは、お好み焼き屋に行った元日雇労働者が、店員の態度に苦情を言ったところ、店員が「営業妨害だ」と言って警察に電話したこと。その人は署員に事情を話したが、西成署に連れて行かれ、イスに座らされた上で、4人の刑事にかわるがわる顔を殴られ、紐で首を絞められ足蹴にされたという(西成署は否定。ただし、弁護士によると、「同様の相談はこの10年で数十件あった」という)。

13日夕方、西成警察署前で労働組合が抗議活動を呼びかけ、本人が被害を訴え始めると、「オレもやられた」「よく言ってくれた」と多くの日雇労働者が集まり、「暴力警官は謝罪しろ」と抗議を開始した。それに対して、府警の機動隊数百人が出動し、労働者と激しい衝突が起きた。多くの労働者が空きビンや自転車を投げつけ始め、さらにフェンスを越えて署に突入した労働者など10人(女子高校生一人を含む)が逮捕される。翌日から機動隊との衝突が続き、機動隊は消火剤や2台の放水車で労働者を追い散らすとする(この放水は強力で、一人は眼に直撃して手術を要するけがを負った)。労働者は機動隊に体当たり、消火器の投げ込み、リヤカーでの突撃を繰り返し、もみあいや投石が5日後まで続いた。

この暴動で逮捕された人数は計24人以上(17歳の少年5人を含む)。肋骨を折った人、機動隊に顔面をどつかれて血まみれになった中学生など多数がケガを負っている。逮捕・起訴された人への救援活動、提訴などの準備がいまも進められている。

釜ヶ崎でのこうした暴動は、1961年以来、今回で実に20回を超える。ほくは90年、92年の暴動、そして今回の暴動もずっと現場にいた。機動隊と群衆が激しく衝突する光景は、よく言われるように「日本とは思えない」ものだった。しかし、今回の暴動は新聞でもテレビでもほとんど報道されなかった。以前のフランスやチベットの暴動の方がよほど多く報道されていた(そう言えば、雑誌『現代思想』は「フランス暴動」「チベット騒乱」の臨時増刊号を出しているが、「釜ヶ崎暴動」の記事は見たおぼえがない)。

釜ヶ崎は日本社会が抱える労働、差別、貧困、医療、福祉の矛盾が集中する「日本の縮図」だとよく言われる。釜ヶ崎の日雇労働者は、不安定就労の問題、そして「手配師(派遣業)」によるピンハネなどのために常に貧困に直面し、何十年の間、野宿、路上死、そして襲撃や排除に直面してきたからだ。しかし、多くのメディアはその現実を黙殺し続けている。

どれほど無視されようと、「日本の縮図」で起こった暴動は、われわれの社会を映し出す。そして、現場は、悲壮感というより、お祭りのような活気にみちていた。プレカリアートの抗議活動、ピンボー人の抵抗は、日本ではどこよりも日雇労働者の街、釜ヶ崎で起こっているのだ。♪



アモイで、考えてみた。

青木純一・倉数茂 往復書簡 ①

青木です。八月三十一日、予定通り福建省のアモイに着きました。東京より気温も湿度も高く、本来なら不快なはずなのに、アモイの空気は僕に馴染むのかな、海からの風がいつも柔らかく体を包んでいる感覚があって、心地いいんだよね。着いて早々買い物手続きがクソ忙しく、それにまだ中国語が全然できないからいろいろビビってるんだけど、倉数さんも近いうちにこちらに戻ると信じてなんとか毎日をやり抜いていますよ。本当に戻ってきて下さいよ。ところで、倉数さんはもう中国には三年になるんじゃないっけ。

倉数さんは知っているだろうけど周囲にはなんだか誤解もありそうだから記しておく、僕が今回中国で日本語教師をすることを決意したのは、酔狂や学的関心からじゃなくて、生活の必要に迫られてなんです。勤めていたパート先が都立駒込病院に隣接した東京都臨床医学総合研究所という施設だったのですが、ここが近々移転する予定なんです（いや、僕の仕事は医学とは何も関係ないですよ。ビル管理です）。移転先に勤められる保証はないし、駒込病院もPFI（Private Finance Initiative、ちなみに日本でのPFI法の公布は1999年）、つまり都から民間に資金調達と施設整備を委ねる体制を導入して、その委託先の業者もすでに今とは違う大手に決定しているから、僕が残れるはずもない。もともと僕はグータラなパート社員でポイラー2級の免許も持っていないから、他の職場にスムーズに転職できるとも思えない。でも定収入はこのパート先だけだったし、原稿収入だけじゃ家賃を払うのもおぼつかないから、急いで新しい職を探していたら、中国の大学で日本語教師をやらないかという話があったわけ。もう渡りに船って感じで決断しました。

こう書くと、僕も結局はネオリベリズム（新自由主義）の影響をひっかぶりながら生きているんだよね。最近デビューした作家たちもそうじゃないのかな。一旦就職してから作家になるという道は別に珍しくないのかもしれないけど、大学院を出てから一回就職して新人賞を獲っているひともいるしね。大学院なんて本質的には大学に特化した就職予備校のほうじゃないですか。でも大学がもう非常勤しか雇わないから、大学院が一種社会の空洞のような場所になっているんじゃないでしょうか。この辺りは倉数さんの方が詳しいだろうけど、僕も長年大学院にいながら今までまったく日本の大学では働いていないウスノロですから、事情はおよそ見当がつくつもりなんです。

でもね、僕はこの光景を少し面白とも思っているんだよね。小説というジャンルが、何を書こうと、何を素材にしようと、それとは関係なく、否応なく社会を反映する芸術ジャンルだとするなら——実際僕はそう思っているんだけど——、ネオリベの直撃を受けたひと、あるいはネオリベ導入以前とネオリベ導入以降の時代の変化を見てきたひと（これには僕の世代も含まれるね）が何を書き始めるか楽しみです。後者の世代の作家には知的な作風が復活しているよね。ポスト・ポルヘス風の実験意識やラテンアメリカ文学の影響など、海外文学からの影響も顕著です。僕はちょっと二十世紀後半の東欧の作家を思い出します。特に旧ユーゴの作家たち、ダニロ・キシユ（1935-1989）やミロラド・パヴィチ（1929-）の実験精神を思い起こすのです。そうだ、中国にも残雪（1953-）がいたね。彼女はカフカ論とポルヘス論も書いている。転換期にある地域の文学ほど形式や文体の実験を重視する傾向が強まるみたいなんだけど、だとしたら今の日本はまぎれもなく転換期にいることになるな。僕も住まいだけは日本から中国へ転換です。

や、取り留めのない結びになったけど、気長に返事を待っています。では、またね。

こんにちは、青木さん。とりあえず無事について何より。僕はあと数日、日本に滞在するつもりです。そう、これからのアモイは一番いい季節です。連日の晴天と海からの微風。湿度もだいたいぶ下がるはず。そちらでの生活を始めたちょうど一年前、僕はひそかにアモイのことを「光と風の街」と呼んでいました。

大学院を終えた僕が中国に渡った事情も、青木さんと大差ありません。なによりも国内に就職口がなかったことが大きい。いわば「出稼ぎ」です。今や中国から日本へばかりでなく、日本から中国へ仕事を求めて移住する時代が来ていると身をもって実感しました。

けれど、中国での生活は決して退屈なものではないと思う。中国がおもしろいのは、都市化、工業化といった急速な近代化と、日本以上のネオリベ化が同時に進行しているところです。文化大革命の傷跡を性急に埋めようと九〇年代の中国が選択したのは、外資を導入して緩衝材抜きで国民経済を世界資本主義に接合することでした。その結果、世界の趨勢になりつつあった投機的資本主義が社会を席巻することになった。いわばすっぱだかでグローバリゼーションに飛び込んだわけ。これが米国の加護の下、比較的自律した国民経済と安定した国民統合を達成できた高度成長期の日本との違いです。もちろんそうした戦後型システムはここ十年で崩壊したけれど、日本では時間的な順序としてあったモダンとポストモダンが、中国では並存している。いや、過半を占める農村人口を考えれば、ブレモダンも含めた三層構造だとさえいえるかもしれない。青木さんも学生たちとつきあってみれば、すぐに、過剰に流動化した社会で彼らがかかえる不安やシンシズムに気づくでしょうし、一歩郊外に出れば、地方から来た膨大な工場労働者の群れを目撃するはず。世界資本主義の最前線である今の中国には、そうしたモダンとポストモダンが生み出した矛盾と活力の双方が充満している。だからこそ、知的な興味を持つ若い人間にとって、中国はチャレンジングな環境になりうると僕は信じてます。

話を文学に向けましょう。青木さんの言うように、ここ一年ほどで日本には実験的な作風を持つ新人作家が輩出した。具体的には諏訪哲史、磯崎憲一郎、青木淳信、円城塔、岡田利規といった人たちだけど、彼らを動かしているのは記号が世界を写像するメカニズムへの技術的ともいえる関心だと思う。そこには、小説を言語的マシンとみる感性がある。彼らは語るべき「物語」も、表象すべき「社会」も信じておらず、社会は、むしろ記号のモジュールがガチャガチャとぶつかりあう不可視の環境だと感じられている。作品というの、そのモジュールのひとつなわけだよね。しかしこれは小説に限ったことじゃない。アニメやコミックのようなサブカルチャーにも似たようなストリームが存在するからです。そして中国の若者たちへの日本発サブカルチャーの浸透ぶりを考えれば、これはネオリベ化した社会におけるリアリティの位相と関わっているのだと考える。彼らは、共通の「現実」像が維持できなくなった環境で、「像（イメージ）」を生み出すメカニズムの作動だけにリアリティを感じている。周知のように、ここ十年の日本の文化的風景は、無数のシミュラクル、小さな物語で埋め尽くされるようになったけど、たぶん、それは中国もかわらない。だとすれば意欲的な作家たちが、物語の内容以上にそれが生み出される仕組みの解析に向かうのも自然なことでしょう。これは東アジアを覆うネオリベ圏における普遍的なテーマだと思う。近代が整合的な形で根付くことなかった中国、近代社会がドラスティックに倒壊しつつある日本の両者は、脱—近代文学的な想像力の過酷な実験室になりつつあるのかもしれない。二つの社会を睨みあわせながら、そうした文化産物を分析していくのは、なかなか刺激的な作業だと思うけど、どう？

では、アモイでの再会を楽しみにしています。

青木純一 ● Aoki Junichi

64年生。文学と音楽、映画、演劇など複数ジャンルを横断、さらには社会との接点を新たな形で模索している。メルマガ「ハトボック批評通信」を好評配信中。http://www.mag2.com/m/0000206311.html

倉数茂 ● Kurakazu Shigeru

69年生。仏文科卒、教育出版社勤務を経て東西二つの大学院に学び、現代文学から建築までを論じる文字通り「自由（フリー）」な批評家。現在、中国・福建省アモイ大学教員。http://d.hatena.ne.jp/kurageruru/

PLANETS vol.05

第二次惑星開発委員会

http://www.geocities.jp/wakusei2nd/p5.html

紙紙&インタビュ

大森南朋

●特集
テレビドラマが時代を映す
●インタビュー
岡田恵和 浅野妙子
三木聡 斎藤環
小谷野敦 大河内一樓
●対談
山本寛×更科修一郎
荻上千キ×宇野常寛

●論考

麻草郁 大見崇
三ツ野陽介 濱野智史
速水健朗 ラリー遠田
黒瀬陽平 宇野常寛

下記店舗にて絶賛発売中!! 定価1,500円(税、送料別)

【東京】タコシェ(通販あり)、ブックファースト渋谷文化村通り店
三省堂書店神保町本店、青山ブックセンター本店、芳林堂書店高田馬場店
ジュンク堂書店新宿店、紀伊国屋書店新宿本店、ブックファーストルミネ
新宿2店、ジュンク堂書店池袋本店、リポ池袋本店、ヴィレッジヴァンガ
ード下北沢店
【大阪】ジュンク堂書店難波店
【京都】ジュンク堂書店京都店、ブックファースト京都店
【名古屋】ちくま文芸館

宇野常寛(第二次惑星開発委員会主催)

ゼロ年代の想像力

「SFマガジン」誌で連載中から話題を呼んだ、気鋭の論者による第一批評集!

早川書房・定価一八九〇円(税込)

頭のよさ、頭の悪さ

どんな業界にも、誰もが了解しているにもかかわらず、それを口外することだけは絶対に避けなければならないという類の言葉がある。「それをいっちゃあ、おしめえよ」と寅さんがいう、あの「それ」が、わたしのいいたいことなのだ。

「あたしたちが小さいころ、小説家っていったら、モンのすごく頭がよくって、いろんなことを考えていて——なにしろ、世の中で一番尊敬できる人たちだと思ってたじゃない。それが、今、日本じゃあ、あたしなんかより頭の悪い人たちが書いてるんだから、あんなもん読む気がしない」

ぎゃはは、いったあ！ よくぞ、誰もが心に思っていることを、臆せずにいってくれたものだ。

「新潮」9月号に水村美苗が発表した「日本語が亡びるとき——英語の世紀の中で」を読んで、思いがけずこの発言に出会ったとき、わたしは快哉を叫びたい気になりましたね。誤解がないようにいっておくと、これを口にしたのは小説家の水村ではない。彼女の「数少ない友人」で長らくニューヨークに住んでいる、日本人の大学教師である。場所はアップタウンの中華料理屋というのだから、これは何となく見当がつくぞ。たぶんコロンビア大学の向かいにあって、オースターの『ムーンパレス』の舞台となった月宮飯店だろう。となるとこの発言の主は……おっといけな。作者があえて名を伏せたのを詮索して、モデルに迷惑がかかってはならない。日本文学のある世界中の大学の図書館では、「早稲田文学」が定期購読されているという話じゃないか。ここではとりあえずエリアーデの翻訳者とだけ、彼女の素性を暗示しておくことにしよう。

それにしてもよくぞいったものだ、わたしは思う。こんなことが思い切っていたのは、おそらくこの人物が日本を離れ、長い歳月を海外で過していたからだ。アンデルセンの童話でも、王様は裸だと喝破できたのは帰国子

女であったというではないか。もしこれが新宿のバアでの発言だったとしたら、たちどころに居合わせた（頭のいい方の）小説家たちによって、ポコポコにされてしまうこと必定。いやその前に内面で規制が働いてしまい、こうした発言に結実することはなかっただろう。

小説家の頭がいいか悪いかについては、わたしには判断すべき基準がない。他のどんな職業と比べてということも、わたしにはわからない。わたしが知っているのは、彼らがアパートの家賃を払ったり、家族を養ったり、ときに愛人といっしょに焼肉を食べにいたりするために、原稿料を得るための方便として小説を執筆しているという事実だけである。小説家とは職業にすぎず、職業には貴賤も馬鹿利口もない。悲劇がもし生じるとすれば、小説家みずからが、自分は人よりも頭がいいと思こんだ次の瞬間だろう。

先に引いた引用のことで思い出したのは、鏡花はそれほど頭がいい人ではなかったと、石川淳がふと思出したように書いていたことである。石川淳は並みの評論家などよりもはるかに明敏な人であったから、おそらく自分が鏡花に比べると、小説家として2段か3段は低いところに立っていることを察知し、それをこうした軽妙な評言で示したのだろう。わたしもまたそれに同感する。鏡花がもし聡明であったなら、あのように愚直に、ひどく効率の悪い方法でエクリチュールを続けることはなかっただろう。だがそれは、鏡花を論じる者の頭が悪くてもいいことを意味はしていない。むしろ鏡花の眼前には、批評家として冴えに冴えきった頭脳が必要なのだ。批評家だけは馬鹿であっては困る。♪

53年生。宗教学・比較文学を学び、日本の大学教授であるとともに韓国・アメリカ・イタリア・パレスチナなど、世界中を放浪する文学者。『貴種と転生』は最も早い中上健次論のひとつであり、その後の中上論にも多大な影響を与えている。映画についても充実した著作を次々発表するほか、都市・美術・音楽・料理・民族差別・漫画と、幅広い活躍領域を持っている。著書に『月島物語』『映画史への招待』『モロッコ流議』など。

ビールの泡 ⑤ 金沢の1

大久秀憲 Ohisa Hidenori

72年生。早稲田文学新人賞、すばる文学賞ダブル受賞の、元祖再チャレンジ小説家。同時期の綿矢・金原旋風も遠い出来事のように、はやくも老境に達した作風を淡々と保つ。夫婦で一晩一樽のビールを飲み干す日々。

僕には義妹が四人いる。ちょっと多い。三人だったはずがいつのまにかひとりふえて、その子もこの春小学校にあがった。

男のまじらない女十割の五姉妹の長女であるところの妻を1とし、以下順に2345と呼び、このことは今後いちいちことわらない。

5はほかの姉たちにくらべて写真がすくない。1234とつづいての5だから、親の気持が分からなくもないが、僕は親ではないので、5と遊ぶときにはやみくもに写真を撮り、1の子どもの頃にはまだ普及していなかったビデオカメラを存分にまわした。

金沢は3が学生時代を過ごした町だった。1が3の暮らしぶりを視察しにいくのについていったのが僕にとってのはじめての金沢で、それから十年以上、3が卒業して町を離れてからも毎年遊びにいらしている。金沢には1の高校の親友が何年か赴任していたこともありよく寄せてもらった。すると、家が近いのでつきあいはじまった東京の友人の実家がじつは金沢で、いまいった1の友人とかねて交友があると分かっておどろいた。その金沢出身のご近所さんの彼の大学の時代の友人が、さっきいった1の高校の友人と高校で友人で、ということは1とも旧知で、ややこしいのでいっそ図にしたくなるが、僕はその最後にでてきた1の旧知の結婚披露宴で突然スピーチをたのまれてまごついた。ややこしいことはなくて、ほどこいてみればそのほかいろいろみな無駄のない糊しろでつながっている。そんな輪の中心に金沢はあるのだった。

そしてこの夏思いがけず輪がすこし広がった。海外暮らしの2が夏の休暇のうちの二週間を金沢での臨時の仕事にあてるといふ。輪の広がりが町の磁力に作用して、学校が夏休み前で社会人134より休みの取りにくい5の都合もつき、五年ぶりの12345そろい踏みが金沢で実現することになった。僕はある企画を手、カメラマンとして従軍した。

蒸し暑い午後、高速バスが駅前に停まった。名古屋から3とともにやって

きた汗びっしょりの5が、前日金沢入りしていた1と僕に、「映画やるんでしょう？」といった。

ビデオカメラはそれまで5専用だったが、めったにない機会だから五人を撮ろう。姉妹の自然なさまを写してみたい、とはじめはそう思った。しかし無理だ。障壁は2だった。こちらがカメラをかまえるものなら勝手に自己ベストのポーズで切り返してくる。野球でよく、ボールへの反応が速いといういかたをするが、2はカメラへの反応がおそろしく速いのだ。2に負けじとほかのものもそれにつづく。君たち、それは不自然だ。

そこで映画という方法がえらばれた。5単独が対象のときには通用していたドキュメンタリーの方法では五姉妹は捉えられない。カメラが写し取る不自然なすがたをシナリオとフレームの締めつけでいっそう強化することによって、自然のすがたへと裏返してしまえないかというところみである。

主計町や橋場町に残る格子戸の町家の並びは撮っていて気持ちがいいだろうけれども、五人をさばくのに屋外は避けたい。室内に閉じこめたいので、座らせたなら座らせたなりで動きを封じなくてはいけない。撮影は僕ひとりの作業になり、僕も出演するのでカメラを動かすことができない。覚えやすいよう台詞は切りつめ、もとより演技はもとめず、NG被害を最小限にとどめるために各ショットはみじかいものとする。

どうも条件をあげていくほどに、見かけだけは小津作品に近づいていくようなのだ。ならばとシナリオも小津ののっとり娘の結婚を主題に取った。五姉妹のなかには冗談ではなく婚期を逸しかねないものがある。3のことだが、おかげでシナリオの見通しもついた。

金沢ではみんなで食事をする予定があった。狙うとしたらそこで、料亭の離れを借りられたのは具合がよかった。早めに部屋に通してもらって、撮影はビールが出されるまでのあいだにギリラ的におこなうことになった。♪



(童言!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!)
私たちが、MAMIによるMAMIのためのMAMIであり、MAMIを想像し、破壊する。私たちはMAMIに突入した。MAMIが流出する。

俺の人生に時給くれ!

池田雄一

連載の貧者のくにをつくれ!

69年生。文芸批評家。著書に『カントの哲学』。共著として『ネオリベ化する公共圏』。

アーネスト・ゲルナーによるシンプルな定義によれば、ナショナリズムとは政治の単位と民族の単位を一致させていこうという政治的な原理のことだ。

政治的単位とは、ここでは暴力の単位ということになる。国家とは、正当な物理的暴力行使の独占を要求する人間共同体である、というウェーバーによる定義にもとづくものだ。たとえば江戸時代では「藩」がそのような暴力の独占共同体だということになる。こうした暴力を独占するのにもっとも効率のいい「大きさ」が、ひとつの政治的単位としてカウントされる。当然のことながら、この単位は戦争などに使われる技術の進展に応じて変化するし、また経済等の発展といった文脈に応じても変化する。日本では、明治維新のあとに政治的な単位が「藩」から「国家」にシフトする。「鉄と血」の時代においては、近代的な国家がもっている大きさが政治的な単位として機能することになるのだ。今後も政治的単位は、テクノロジーの発展によって、大きくなる可能性もあるし、また場合によっては小さくなる可能性もあるだろう。

では民族の単位とは何なのか。政治的単位とはちがって、民族は何かという問いに対するゲルナーの説明はあいまいだ。民族はナショナリズムの時代においてはじめて定義されるといっている。ところが、最初の定義ではナショナリズムとは政治と民族の一体化の意志だということになるわけで、そこでは民族があらかじめ存在していることが条件となっている。ゲルナー自身が見とめているように、これは「パラドックス」だと言うしかない。

ゲルナーの説明では、農耕が主流の時代から、産業が主流の時代にシフトすると、社会の成員もまた地縁、血縁、職業、階層といった要素にもとづいた半永久的な分類の状態から、そうした分類が解除され均質化された状態へと移行することになる。産業社会そのものが、成員のすべてに読み書き能力を獲得することをもとめるからだ。それをゲルナーは、「エントロピー」のメタファーで表現している。均質化と無定型化への流れの比喩として熱力学

を使っているのだ。近代国家ではその成員がみな均質であるような状態が理想だとされているのは、近代が産業社会だからだということになる。

こうした均質化の流れを阻害する要素がある。言語のちがいが、慣習のちがいが、住んでいる地域のちがいが、そしてそれらとはまったく別の位相にある身体的な特徴のちがいが、といった要素のことである。これら「生の痕跡」とでも呼ぶべき要素のちがいが、社会の均質化を阻害する。ここでいわれている生の痕跡とは、ジャック・デリダが使用している痕跡概念、つまり「エクリチュール」に近い。産業化によって読み書き能力を獲得した社会においては、これら生の痕跡を舞台にして、その内部は均質でなければならないような領域が構成されることになる。こうして構成された領域が「民族」だということになる。それはどんなに自然なもののようにみえても、生の痕跡とその解釈によって構成されたものだ。

そうすると、民族を構成する生の痕跡は原理的には何でもよい、ということになるはずだ。自分が抱えている趣味的な嗜好、政治的な主張、経済的な状況といった要素によって民族が構成される可能性はないだろうか。そう考えるのは、近年の「ワーキングプア」や「ロスジェネ」についての言論が、なんとというか、端的に言って「ナショナリズム」に似ているような印象があるからだ。いわゆる「富裕層」への敵愾心を惜しげもなく表明する、「こいつナイーブすぎるのとちゃう」と言われるのも厭わない理想主義的な信条、そして「いざとなったらやっつけてやる」といった武闘派的なかまえ、といった、これらの言論にみられる特徴は、人々が知っているはずのナショナリズム的な熱狂とどこか重なっているようだ。その熱狂がどういった状況を切り開き、またどういった「ステイト」を構築するのかがみえてこない。とりあえずナショナリズムがかかえている諸問題についてガチの検討、これをしないことには先に進めないだろう。♪

一度だけ、ナマの松本清張を見たことがある。ぼくの実家に近い荒神谷遺跡で大量の銅剣が発掘されたのを受けて、松江市でシンポジウムが行なわれた。考古学界の先生たちを尻目に、司会役である清張ひとりだけが喋りまくっていたという記憶がある。おばさんのようなイソノバラの髪、ギョロリとした眼、なによりもあのタラコちびる。自信に満ち溢れた「大作家」がそこにいた。しかし、その作品を読んでみて、作家のイメージとはまったく逆の印象を持った。登場人物がみんな小心者なのだ。『内海の輪』の主人公は、誰にも知られずに女に会うために多大な努力をしている。「どんなことから破綻が生じるか分からない」から、不倫の痕跡を残さないように「万事、安全を期した」。また、『渡された場面』の主人公は、愛人の女からある作家の原稿を手に入れ、女を殺した。そして、その作家が病死したのを確かめて、自分の作品として同人誌に発表する。それが文芸誌の同人誌で取り上げられ、地方文化人の仲間入りしたあとも、彼は女を殺した現場近くには絶対に近づこうとしなかった。だが、その小心こそが、彼らの命取りになる。小細工をしたことが、かえって、あとで動かぬ証拠となるのだ。まるで、自らフラフラと死地に赴いているかのようで、読みながら、「そんな余計なコトしなけりゃいいのに!」と何度も思ったものだ。これらの登場人物の小心さは、松本清張自身のものでもあったようだ。二十代から三十代にかけての清張は、版下職人としての技術を身に付け、朝日新聞九州支社の広告版下を描いていた。大阪から来ている大学の社員と違い、学歴のない現地採用者、しかも図案係という陽の当たらない仕事なので、自分の「存在そのものが認められ」なかつた、清張は『平生の記』で回想している。

広告部の後輩だった吉田満が見た清張は、「ずんぐりタイプで顔色は黒く、折目の消えた茶色とも黒色ともつかぬ古い背広を、いつも着ているような印象」だった。「よこれ松」というひどいあだ名を付けられていたという(『朝日新聞社時代の松本清張』九州文化の会)。

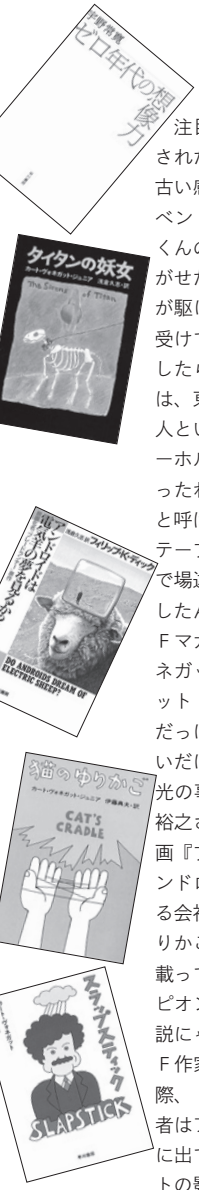
この呼称は、図案描きはいくら足掻いても図案描きから抜け出せないという蔑視と、強い個性からくる行動を揶揄したものだ。朝、出勤して仕事にかかる前、硯の墨を磨りながら、ぎょろぎょろ鋭い眼を動かして、「ははは……」と突然笑い出したり、「畜生」と何度も叫んだりするのを見ると、心得た校正係員は、(またやっ)で聞き流したが、出張から帰ってきた部長

けものみち計画の ⑤松本清張 II アンコウ 文豪擬獣化宣言



内澤 旬子 ● Uchizawa Junko
67年生。世界各国を旅し、本作りの場から、図書館・層層場・トイレまで取材。緻密な視察と果敢な切り口で、繊細なイラストと、批評性と好奇心の絶妙に現在した文章を著す。著書に『センチの書斎』や『世界層層紀行』など。http://drhena.ne.jp/photo/0767/

文 南陀楼綾繁 ● Nandaro Ayashige
67年生。書物をめぐる文筆。編集に携わるとともに、古本・マッチャブルの収集家としても著名。不登ブックスストリートや「箱古本市」の提唱者でもある。著書に『ナンダロワァヤシゲな日々』『路上派遊書日記』など。http://nandaro.ne.jp/kyasaku/



注目の若手批評家・宇野常寛の『ゼロ年代の想像力』が単行本化されたね。90年代=セカイ系から、ゼロ年代=決断主義へ！と、古い感性の葬送を宣言する挑発的な批評集だ。この本の刊行記念イベントが8月末に青山ブックセンター（本店）であってさ、宇野くんの対談相手としてゲスト出演しました。当日はこの夏、世を騒がせた例のゲリラ雷雨の直撃を受けたけど、大雨の中、満杯の観客が駆けつけてくれたよ。「最近天気までが宇野くんの本の影響を受けて、決断主義の大雨となって」なんてツカミのジョークをカマしたら、やや受けだったな（苦笑）。イベント終了後の打ち上げには、東浩紀やチャーリー（鈴木謙介）はじめ、川上未映子と市川真人という我がワセブン・ファクトリーのイーディ&アンディ・ウォーホル組も顔を出したりしてね、いや、けっこうニギヤカナ宴になったね。宇野くんの命名で『早稲田文学』は「文学界のキューバ」と呼ばれていてね、打ち上げの居酒屋でも我がキューバ・チームのテーブルは市川（カストロ）真人議長の首頭のもとラテンのリズムで場違いに踊りまくってたっけ。川上未映子さんとも久々にお会いしたんだけど、宇野くんの『ゼロ年代の想像力』が早川書房の「SFマガジン」に連載されてたということもあってさ、カート・ヴォネガット話で大いに盛りあがったね。もともとはカート・ヴォネガット・ジュニアだったのが、いつ「ジュニア」のシッポが取れたんだっけ、とかさ。川上さんは『タイタンの妖女』がお気に入りみたいだけど、そういうヴォネガットをリスペクトする爆笑問題・太田光の事務所は「タイタン」って名前なんだね!? 映像作家・中野裕之さんの事務所は「タイレル・コーポレーション」で、これは映画『ブレイドランナー』の原作、フィリップ・K・ディック著『アンドロイドは電気羊の夢を見るか?』の中でレプリカントを作ってる会社なんだよな。ヴォネガットはポコノ教が出てくる『猫のゆりかご』が傑作だけど、「愛は負けても、親切は勝つ」って名言が載ってるのは『スラップスティック』だったっけ？ それとも『チャンピオンたちの朝食』？ 『ジェイルバード』？ ヴォネガットの小説に著者自身を戯画化したキルゴア・トラウトって架空のSF作家が出てくる。『貝殻の上のヴィーナス』が代表作だけど、実際、トラウト名で同名の小説も出版、翻訳もされてるんだよね（著者はフィリップ・ホセ・ファーマー）。村上春樹の『風の歌を聴け』に出てくるアレク・ハートフィールドって、もろキルゴア・トラウトの影響下の作家なんだろうな。春樹の初期の短篇に「ニューヨ

文学6

居酒屋で焼鳥を食べながら炭坑のカナリアを思う



中森明夫 NAKAMORI AKIO

ク炭坑の悲劇」って小説があるけど（『中国行きのスロウ・ポート』所収）、これはピーシーズの往年のヒット曲のタイトルを借りて、内容的にはヴォネガットの“炭坑のカナリア理論”を主題にしたものなんだろうな。炭坑夫はカナリアの鳥カゴを持って坑穴へと入ってゆく。カナリアは人間より敏感だから、ガスもれがあると早くバタバタ死んじゃうってんだ。早期危機警報だね。ほら、オウム真理教のサティアン捜査の時に捜査官らがカナリアのカゴを持ってたでしょ。塩田明彦監督にはオウムを主題としたズバリ『カナリア』っていう傑作映画もあったけどさ。で、その炭坑のカナリアこそが作家だってヴォネガットは言うんだよ。作家は弱くて敏感だから、早くバタバタと息絶えちゃうことで人々に危機を報せるってワケ（独裁政権下で言論弾圧される作家なんてもろそうでしょ）。春樹と共にもっともこの考え方に影響を受けたのが大江健三郎だろうな。そういや大江には『壊れものとしての人間』というタイトルの批評集もあったっけ（平野啓一郎の小説『決壊』の鋭い主題に30年は先んじてるね!）。ところでボクのヴォネガットのベストは『スロウ・ハウス5』だな。主人公がトラルファマドール星人って宇宙人につかまって時間の巡礼者になっちゃう。この宇宙人にとっちゃ、時間はリアックに流れるもんじゃなく、遍在する、つまり場所のように存在するってんだよ。そう、過去は決して消え去ったりはしない。これはヴォネガットが第2次大戦に従軍して、ドイツ軍の捕虜となり、味方である連合軍のドレスデン大爆撃に遭い（膨大な死傷者が出た）、九死に一生を得たってのが根底にあるんだ。この経験を過去の出来事=ノスタルジーとして描くことを拒んでるんだ。『スロウ・ハウス5』の主人公にとって過去の傷は、いつも生々しい現在として立ち現れる。彼の名前はビリー・ビルグリム（巡礼者）って言うんだ。だけども、そもそも書物——小説における時間も同じでしょ。過ぎ去ったはずの時間が、前のページをめくれば、ちゃんとそこにあるじゃん。永遠にね。つまり小説ってのはトラルファマドール星人の発明で、それを読む時、ボクらは誰もが『スロウ・ハウス5』の主人公のように時の巡礼者（ビルグリム）になるんじゃないかってさ。♪

60年生。アイドル評論家。『週刊朝日』で「アタシジャーナル」、『サブラ』で「美少女映画館」を連載中。青山ブックセンターでやった宇野常寛氏との公開対談は10月25日発売の「SFマガジン」12月号に掲載予定です!



や外交員は、突然、松本さんの奇声を聞いて、暫くは呆気にとられた」
不勉強だと軽蔑している連中から学歴や社内での地位のことで蔑まれ、家に帰れば両親や妻子を抱えて身動きがとれない。奇声は、それらのプレッシャーに耐えかねて放たれたものではないか。その時期の清張の顔は、深海の水圧に押しつぶされそうになっているアンコウを思わせる。
作家として成功してからも、編集者に何枚か原稿を渡すことに感想を云わせたり、他の作家の動向を気にしたりと、小心者であり続けた。しかし、その背後には、そんな執拗な性格を陽気に笑い飛ばし、スケールの大きな話を削りだすもうひとりの清張がいたのではないか。そう思えてならない。♪



photographers' gallery (pg)

→東京・新宿にある、写真家たちの自主運営ギャラリー。単なる写真ギャラリーにとどまらず、レクチャーやシンポジウム、写真集の編集・発行、エッセイや批評の発信、移動展など、「pg」という集団（ギルド）それ自体が「メディア＝媒体」となる活動を続けている。第2期「WB」では、pgのメンバーの作品が交代で、小説側表紙を飾ります。 <http://www.pg-web.net/>

高橋万里子◎Takahashi Mariko

70年神奈川生。2002年、photographers' galleryに参加。個展に「月光画」(photographers' gallery 東京2007)ほか、グループ展に「VOCA展2006」(上野の森美術館 東京2006)、「MOT アニュアル2008 解きほぐすとき」(東京都現代美術館東京2008)など。10/3から10/31までphotographers' galleryにて個展開催。

【川上】 その「大丈夫」っていうのは？ 具体的にどういことを？

【内田】 当時のコンピューター技術だと、線が切れてると、すごい大変だったんですよ。目玉が、囲まれてなかったりすると……。

【川上】 色ももれちゃう？

【内田】 そう、だからなるべく線が閉じてるのがいい。そういう絵で、当時いちばんお手本になっていたのが、ディズニーだったんですよ。それで、ディズニーの絵をずいぶん見ました（笑）。そしたら吉田戦車に見抜かれて、「ディズニーになったね」とか言って……さすがは吉田！（笑）。

【川上】 いまのお話は、コンピューターを使うための技術的な部分ですよ。いままで描いてきた絵に対して「変えてみよう」という、創作上の理由で変えたことはないですか？

【内田】 それもあったのかも。コンピューターを使い始めたのはそのとき結婚してたひとの提案なんですけど、そういう相手から言われても、「自分の絵を変えたくない」と思ったら変えなかったはずですよ。だから、ちょっと飽和状態にきた時期ではあったんじゃないかな。

【川上】 すごい的確な提案ですよ、「パソコンに対応できるように繋げてくれ」と。

【内田】 繋げようと思ったのは、自分だったんです。「色をつけるのが大変だ」と言われて。カラートーンとかスクリーントーンとかで影をつけていても、目尻の曲線とかは、アシスタントさんの癖が出ちゃうんですよ。それを見て「大変なんだろうな」と思ってたので、機械だとなおさらですよ。いまも離れたりはしてますけど、いちど閉じる癖がついたので、誰にでも世話をしてもらいやすくなりました。

【川上】 世話を（笑）。

【内田】 もっと初期の頃には、サインペンをやめてGペンにしたので絵柄が変わったこともあります。サインペンは線が均一になっちゃうんで、タチカワっていうブランドのGペンに変えたんですけど、硬いので細くすべらせて描いてたら、やっぱり均一な線になっちゃう。それで、セブラの、押すといちばんバシッとひらくペンに変えたんですよ。お習字みたいな感じで、線の味を出そうと。で、タチカワのペスが40本くらいあまったから、それも吉田戦車に——また吉田戦車が出てくるんですけど（笑）——、彼の持ってたセブラとトレードしたんです。

【川上】 交換ですね（笑）。

【内田】 吉田戦車ね、すごい筆圧が強いからペン

がすぐにだめになっちゃって、タチカワじゃなきゃだめなんだって。でもタチカワってあんまり売ってないって言ってたから、「じゃあわたしのと取り替えて」と（笑）。

【内田】 画材とか、使ってるものとか、まわりから情報をもらうんだけど、みんなほんとうに惜しげなく教えてくれるんですよ。それに関しては「秘密です」というひとに会ったことないな。

【川上】 教えるといえば、内田さん、京都の造形芸術大学でマンガの講座をもってらっしゃるんですよ。

【内田】 わたしの授業はほんとうにちいさな塾みたいなもので、十人くらい。寺子屋系です。

【川上】 どんなことを教えてらっしゃるんですか？

【内田】 最初、自己紹介マンガを描いてもらう。だってエッセイマンガって、教えることないじゃないですか、どんな風に描いてもいいから。だからそれ見て笑ってる、わははと（笑）。なんかいい加減なんですけど。

【川上】 でも楽しそう。

【内田】 まだ二年目なんですけど、去年は前期がわたしで、後期が『静かなるドン』とかを描いてらっしゃる新田たつおさん……この組み合わせ、生徒さんがめっちゃめちゃん困るのね（笑）。

【川上】 すごいですね、学側側のそのチョイス（笑）。

【内田】 でも、去年の生徒がひとり、卒業したあとわたしのところで手伝ってくれてるんです。

【川上】 アシスタント？

【内田】 最初から描けたから、わたしは何も教えることがなかったんですけど。

【川上】 「この子描けるな」というのは、どこでわかるの？ どこ、とは取り出せないものですか？

【内田】 そのひとはね、もうぜんぜん描けるんですよ。

【川上】 ど……どう？ どう描けるの？

【内田】 本に載ってるのと同じものが描けるんですよ。で、もうデビューが決まったの。来月デビューなんです。

【川上】 でも、文章も、ワークショップとかしても、はっきり「これ」というところはわからないですよな。「混沌としてるけどなんかある」と感じて。これは素人のマンガだ、これはプロのマンガだ、という直感のようなものが、説明できない感じにあるんですか？

【内田】 「この絵はどうか？」って思っても、読めちゃうマンガとかはありますね。

【川上】 絵ってぜんぜんわからない。やっぱりみんな基本的に上手だから。崩してあえて単調な絵を描いてるひととか見ると、どれくらいまわってきて、本質的にどのくらいの絵の上手さかまったくわからないんですよ。

【内田】 線がいっぱい引いてあって、上手なのかなって思ったら、よく見るとデッサンが狂ってたりとかはしますよね。でも、デッサン狂ってても「そのひとの絵が好き」というひとと確実にいる。だから、最後は趣味なのかなって気がしますね。

【川上】 たえば、セリフにすごく重きを置くひととすれば、絵がすごく好きなひとといますもんね。だから、どの部分でも成り立つといえは成り立つのかなあ。

【内田】 あと、ウンチク系のマンガがすごく好きだと、「絵とかセリフとかどうでもいい」とってひとといますよね。知識がつかまれば、それだけで読んじゃうひと……じつはわたし、ちょっと苦手で。「こんなことしてるのが大人だね」で終わるみたいな読むと、「ケッ！」とか思っちゃう（笑）。

【川上】 ものすごい作品の洪水のなかで内田さんはずっと描き続けてらっしゃるんだから、すごいパワーだと思えますし励みになります。

【内田】 でも、お店とかにはわたしの本ないですよ。行くところに行けば「あ、ここはあった、よかった」というときもあるけど、近所の本屋には「ぜんぜん置いてないよ、チッ！」とか、文句言ってやろかなって思うこともある（笑）。でも、もうそれも慣れました。

【川上】 春菊さんに聞くのは違うのかもしれないんですけど、卵巣にこう、手みたいのあるじゃないですか？ 「乳と卵」でも書いたんですけど、あの、卵巣と手のつながってる場所は何なんですか？ ポーンと飛び出すとか言うじゃないですか。

【内田】 あの絵はねえ、卵管が卵巣にかぶってる絵らしいんですよ。絵、描くのか？ ハンガミみたいになってますよね。こう、子宮があって膣があって……ほんとは離れているんですよ。わたしも途中まで繋がってると思ってたの。

【川上】 ここからポーンと飛ぶって言って。

【内田】 飛ぶの飛ぶの！

【川上】 どこを飛んでいくんですか？ 肉？ この空間は肉なんですか？

【内田】 腹腔内です。

【川上】 え……空？ 隙間？

【内田】 女の体っていうのは腹腔内にいろんなものがいんですよ。それもわたしショックだったの。男は閉じているものが、女に関しては開いている。

【川上】 じゃあ内臓の隙間みたいに空洞があるってこと？

【内田】 ぽこっこ空いてるわけじゃないんですけど。卵巣が交互に卵を出すとき、もう既に卵管が「さあ、来い」と動いているらしいんですよ。逃すことはほとんどないらしいんですけど、たまに逃れて腸の裏とか行っちゃうらしいんですよ。

【川上】 卵が！

【内田】 さらに受精卵も行っちゃうことがあって。掴みそこねるとどこかへ旅してしまう。

【川上】 ああ、それが子宮外妊娠だったりするんだ！ 腹腔って、肉や液体でみちみちじゃないんだなあ……自分の体やのに知らんことばかり！

【内田】 わたしもこれ聞いたときびくびくして。精子っていうものは膣を通してやってきて子宮でだけ出会うのかと思ってんですけど、通過を許された精子が腹腔内にもいるんですよ。

【川上】 真ん中で出あって、ビタッって着床するのとか……。

【内田】 「こちらからどうぞ」というところじゃなくて、壁を抜けていきなり家のなか入っちゃうみたいな。

【川上】 裏技ですね。

【内田】 うっかり好きじゃないひととセックスとかしたら「そんなやつ精子が腹のなかを〜」みたいなえらいことに（笑）。養老さんの本では「迷走」と言葉を使うんですけど、受精卵も、稀にある。

【川上】 迷走の果てに……？

【内田】 腸に着床したりするのも稀にある。

【川上】 でも腸では産めないですよ？

【内田】 そこで産まれてきた子どもも稀にいるんですけど！

【川上】 えっ、まさか肛門から産まれるの（笑）？

【内田】 それはもうお腹を切るしかないんじゃないでしょうか。でも、腸の裏で産まれてきちゃう子どももいるってことは、わたしたちの胎盤とか子宮の立場は？ とか思いますよね（笑）。

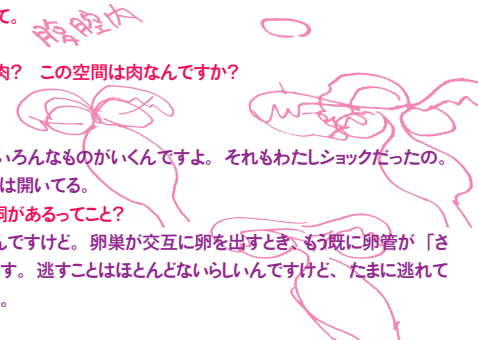
【川上】 腸の裏で育った胎児とへその直通のラインをもってる胎児とは栄養の雰囲気も違いますし……同じように産まれてくるのかしら。

【内田】 3キロ以上っていうようなことではないとは思んですけど、産まれてきた子もいるんですよ。脳細胞だって、どこかがだめになるとどこかが代わりになるって言うじゃないですか。だからきっと、「大変だよこ着いちゃったよ、おい、なんとかしよう！」ってなるんじゃないかなあ。すごいですよね。

【川上】 不思議なもんですよええ。

【内田】 わたしも卵管だめにして取ったときに、「卵巣もいっしょにとってたよ」と見てたひとに言われて、「卵巣がいっしょにならなかったんだ、半分になっちゃった……」ってすごいショック受けて。もっいっことあるって言われてもすごい落ち込んだんですよ。でもお医者さんに聞いたら、とったのは卵巣じゃなくて卵管で。しかもそのあと3人産んでますから、人間の体にやっぱり必要なものはふたつあるってことなんですよ。知り合いて、睾丸いっこのひとと子どももいるひとといますし。3個のひとと3人くらい知ってますけど、たいてい役に立ってない（笑）。

【川上】 全部稼働してたらいいんですけどね。何がいのかわかりませんが（笑）！



内田 春菊 ● Uchida Shungiku

59年生。84年漫画家デビュー。『目を閉じて抱いて』『ワイルドハズ』など著書多数。94年に『わたしたちは繁殖している』『ファザーファッカー』でBunkamuraドゥマゴ文学賞受賞。セックスを正面から扱う作品群は、男女を問わず多くの共感を呼んでいる。

川上 未映子 ● Kawakami Mieko

76年生。文筆歌手。初小説『わたくし率 イン 歯一』または『世界』が芥川賞候補となるなど各所で激めに絶賛。言動も含め、いまもっとも期待される書き手のひとり。アルバム『頭の中と世界の結婚』エッセイ『そら頭はでかいです、世界がすこんと入ります』も！ <http://www.mieko.jp/>

〔内田〕 いちおうホルモンでいうと、オキシトシンというものが出てるらしいですよ。陣痛のとき出ていて、オーガズムのあとと、母乳の分泌まえくらいにも出てるらしい。それが出ると、自分の子どもがかわいいと思えるって効果があって、人類愛っぽいホルモンらしいんです。それを取ってこのへん（鼻を指す）に塗ったりすると騙されやすくなるんだって。

〔川上〕 人類愛が行き過ぎちゃうんですね（笑）。

〔内田〕 子どもだって、たいしてかわいくななくても自分の子どもだからかわいくなるわけですからね（笑）。男のひとは、射精後のホルモンってどうなんだろう。

〔川上〕 何もかもに興味が失せるんでしょう？

〔内田〕 「あー済んだ済んだ」って感じになるんでしょうね。昔、女性が嫌かってセックスレスになるおウチがあると、「男のひとはやらせてあげないと、何も考えられなくなるようになる」みたいに言って、奥さんを責めるひともいましたよね。どうなのって感じだけど、確かに「やりたい」と思ったときの熱心さは、女とかなり違う。

〔川上〕 性犯罪は、まあ分かってるぶんということでは圧倒的に男性のほうが多いですよ。

〔内田〕 ドーバシンの量ですよ、たぶん。

〔川上〕 どんな気分になるんでしょうね。

〔内田〕 脳には、セックスを司る部分があるらしいんですけど、エイズが流行りかけのときにゲイのひととかいっばい亡くなったでしょう。そのときに、新しい病気だったこともあって脳の解剖がすごい勢いでされるわけですよ。

〔川上〕 その部位が違うんですか？

〔内田〕 一般男性よりゲイのひとは小さいらしい。女性も小さい。その部位が大きければ欲望も大きいし、リードするような強引さもきつとあると思うんです。わたしはたぶん、女のわりにはそこが大きいんだらうなって自分で思ったんです。

〔川上〕 初期設定として（笑）。

〔内田〕 この歳になると認めるしかない。



〔川上〕 春菊さんの文章は、比喻とかも毎回毎回自分の頭で、「今まさに切実に考えている最中だ」って感じが伝わってきます。その都度に女のひとの体だったり男のひとの体だったりを使って関係を鮮やかに書かれます。「こうだからこれを書くんだった」って、あらかじめ結論だして書いてる感じがしないのが好きなんです。

〔内田〕 それ、できないんですよ。ある作家さんが「わかってることを書いてちゃだめなんだ」っておっしゃっていたと、ひとに聞いたんです。ちょっと安心。だけど、書いたあとで「じつは最初から決まっていたウフフ」とか言ってみたいよね（笑）。

〔川上〕 三島由紀夫みたいに、嘘かほんとかわからないんだけれども「最後の一行を決めてから書く」みたいなことを言うひともいるんですよ。それも素敵ですけどね。

〔内田〕 マンガ家でもありますよ。「予想外の方向へストーリーが展開することありますか」って誰かが質問したら、ちょっとムツとして「計算つくです」って。「すごい！」と思いつつ、わたしは違うタイプだから……。

〔川上〕 どちらも突き詰めてやると、そのすばらしさで絶対あると思うんですよ。春菊さんは、養老（孟司）さんも指摘されてたけれども、背景があんまりなくて、人間がすごく大きく描かれている。顔とか表情とか。それは人間のことを描こうとしてる、読み手にもそういうふうに伝わります。その内田さんの、わからないままに描いてやってるんだっていうのがすごくびっぴりっていうか、素敵なかたちだなあと思うんです。

〔内田〕 うれしい。うふふ。

〔川上〕 さっきの「普通」問題でもそうなんですけど、「個性が大事」ってあんなに標榜してるのに、ほんとにちょっと粹外的なことしたら叩かれるんですよ。好きな服着て、自分がいいと思った道を生きたいじゃんってのが、言葉上では認めてる顔してるのに、実際のレベルではひとはぜんぜん認めない。でもやっぱりわたしもすごく保守的……って言うのもいやなんです。親とかまわりから与えられた価値観で構成されていて、ここぞというときにもそれに基づいて動いてしまうところがあるんですよ。

〔内田〕 それはもう、無理もないことですよ。

〔川上〕 でも、それが自分で吟味して選び直したもならいいんだけど、吟味が追いつかない形が出てきちゃったりする。そういうときに、内田さんのインタビューや対談を見たりすると、ほんとに「ひととか何を言うとか言わないとか気にしない」ってことすら言わない、みたいなね。それは凄いなことだなと思いますよ。でもそれは内田さんにとっては、まさに「普通のこと」なんですよ。

〔内田〕 わたしの育ちが、田舎なうえに、父親がいるんだかないんだか、母親がホステスしている

ようなとこだから、そんな場所で長屋に住んでいたりすると、もうほんとうにベタベタな感じなんですよ。実際はそんなことないのに「あそこ、父親が姉妹で違うらしい」っていう噂にいつの間にならなくなったり、「ああ、そんなこと考えてるんだあ」みたいなことをあとから聞いてびっくり。それを母は、けっこう他人からなんて言われてるか気にするんですよ。「気にしてもしょうがないのに」っていうのは、母を見てその逆説的に出てきたことかもしれないですね。

〔川上〕 例えはお母様だったら気になさって、それにたいしてどういふふうにされてました？ 悩んだりするんですか？

〔内田〕 外面（そとづら）がいろいろですよ。でも、あとでひとの悪口言ったりする。そういうの面と向って言えばいろいろになって。

〔川上〕 そういうのを通して内田さんの最初期にはもう、世間の表で回っていくもの見え方と、実際にある事実とは、もともと違うものだったという見方ができたのかもしれないね。

〔内田〕 それか言葉になっていくのはもっとうずうずとあとのことなんですけどね。さっきの個性っていう話だと、仲のいい岸田秀さんが「教育は平凡への矯正である」っておっしゃるんです。個性は誰にでもありそうにいうけれど、他人と同じことをしたほうが痛い目をみなくて幸せだってひともいっばいいるわけだから、「とりあえず平凡にしていれば、君は失敗しないよ」って個性を押さえつけるのが教育なんだって。「だから教育はターティビジネスである」って言い切られてるんですよ。それが悪いという意味じゃなくて、芽を押さえつけても、個性があるひとは出てくるんだと。そこでまず「普通にしてなさい」っていうのはある種の親切だっておっしゃるんです。

〔川上〕 まず、耕すじゃないけどとりあえず平らにして、畑にして、そこから自然に出てくるものは出てくる、みたいな。

〔内田〕 才能もないひとに、下手に「君の個性で生きなさい」って言ったら、そのひとは戸惑ったり、あとでえらい目にあうことのほうが多いんだから、って。そういうことを言葉にするひとに出遭うと、「ああ！ そうだったんだあ！」みたいにスツとしますよね。個性を伸ばす教育っていろいろ言われるし、わたしの子どもたちも言われてるのかもしれないんですけど、真に受けてないんで、わたしも（笑）。



〔川上〕 それにしても、「ジャンル」って言葉も意味なくなるくらい、内田さんはたくさんのことをおやりになってますよね。マンガ描くし小説書くし、映画出るし歌も歌うし。

〔内田〕 それは川上さんも（笑）。

〔川上〕 わたしは気がついてら歌と小説だったんです。だから「何故かやることが増えていく」感じはわかるんですけど、内田さんの場合、マンガのなかでもたくさんのことをしてらっしゃるでしょう？ いちばん最初で、どうしてまずマンガを取ったんですか？ 当時から、文章をお書きになるのもたぶんお好きだったでしょう？

〔内田〕 ふつうに好きですよ。でも、幼稚園くらいから「マンガ家になろう」と思ってたんですよ。たぶん。親に言ったのは小学生のときで、怒られたんだけど、怒られたからよけいに意識したんだと思う。好きで好きでずっと描いていたから、親もわたしがマンガ家になりたいとわかってると思い込んでいたのに、親はそんなことは想像もしてなくて（笑）。文章も好きで書いてましたけど、それも含めて、マンガ以外のことを仕事にしようとは、最初は思ってませんでしたね。

〔川上〕 そうい、絵を描くのが好きなたくさんの子どもが幼稚園のころ思うだろう感じからスタートして、現実感がでてきたのっていつごろですか？

〔内田〕 最初は、仕事してものがあんまり分かってなかったですよ。どうすればなれるのかも。とりあえず、本に載ってる作品みたいなことができればいいんだと思って、描いてみたんです。でも、バス用の定規なんて持ってなかったから、線を引くだけでも汚れてしまって、「なんでみんなきれいに引けるんだらう」って悩んでた（笑）。インクも、持ち込みのとき最初は手紙用のインクで描いていて。担当さんに「これ、万年筆で描いたでしょ？」って言われて、「え、失礼な！」とか思ったけど、製図インクとか証券用インクの知識もなかったんですよ。

〔川上〕 そこから今日にいたるまでに、絵があきらかに変わったって、内田さんご自身で感じることでありましたか？

〔内田〕 それはね、ちょっとわざとやったときがあるんです。

〔川上〕 絵柄って、小説でいったら文体に相当するものだと思うんです。だとしたら、ペンを変えたりか用具を変えたりとかで変わっていくものだろうか、それとも意識的に変えるのかなって。

〔内田〕 画材が変わっていったのももちろんあるし、あと、コンピュータを導入するとき、誰かが加工してくれて大丈夫な絵にしくちやいけいと思った時期がありましたね。そうすると、どうしてもアニメーションの絵を参考にしないといけないうね。それで一時期は絵が変になったんですけど、けっこうは、誰にやっても大丈夫、っていうかたちに落ち着きましたね。

町田市市制50周年記念特別企画展

文学の鬼を志望す——八木義徳展

2008年10月18日（土）—12月14日（日）

休館日：毎月曜・第2木曜[※] 観覧時間：10:00-17:00 入場料：無料

※ただし、11月3日、11月24日は開館

私にさっての文学開眼の書は、
十八のときに読んだ八木義徳の『風祭』だった——佐伯一麦

町田市民文学館ことばらんど

〒194-0013 東京都町田市原町田 4-16-17
TEL 042-739-3420 FAX 042-739-3421



「文学の鬼を志望す——八木義徳」展
於 北海道立文学館
2009年1月31日～3月29日



【川上】もう!? すっぴんかえし読んでるのが、みんなちっちゃいころの話やから……なんか不思議です。

【内田】4コマだから単行本分たまるのに時間がかかって、本になるころには成長しちゃってるんですよね。マンガだと、人物をコロコロちっちゃく描くじゃないですか。そのせいで、息子①が中学生になったころ、友だちから「似てないよ」って苦情が(笑)。

【川上】そういえば、4人お父さんがいらしても「チャンスがあればまだまだ産みたい」って言ってらしたのを、どこかで読んだことがあるんです。

【内田】そうだったんですけど、そろそろ打ち止めでしょね(笑)。ひとり目を産んだとき、すぐおもしろかったんですよ。

【川上】出産がですか? 産んだあと?

【内田】妊娠も出産もそのあと。いまね、家と仕事場が一緒なので、マンガ描いているときに「母ちゃん見て、歯が抜けた〜」とか来てたりするんですよ。だから「エッチなの描いてるから、いま入っちゃダメだよ」とか言ったりして(笑)。

【川上】いちばん上のお兄ちゃんだったら、もうとんどん読めるでしょう?

【内田】いつのまにか全部読んでましたね。

【川上】どう反応でした?

【内田】息子は幼稚園のとき、「コンドームって何?」って聞いてきたんです。「おちんちんに被せる袋で、子どもがほしくないとき、赤ちゃんの卵のほうに種が行かないようにするんだよ。病気の予防にもなるの」って教えたんですけど、考えたらなんて知ってるんだろうと(笑)。

【川上】幼稚園児なのに。

【内田】そしたら、榎本俊二さんの『えの素』のなかに、「[コンドームって何?]」って聞いたらお母さんが火のついたように怒った」ってエッセイ漫画が入ってたの。それを読んだみたいなのね。でもじゃあ息子は、わたしか烈火のときと怒るとは思ってなかったんだろうか(笑)。あとから話し合ったら、「たぶん思ってなかったと思う」って言うんですけど。

【川上】話し合ったんですか?

【内田】うん。息子が精通のときには、「身体が大人になっておめでと〜」って乾杯もしましたよ。

【川上】本当ですか! それは息子さんからの報告ですか? 旦那さんに?

【内田】いまの相手と暮ら始めてから、男同士だし、だんだんと身体のこともちゃんと相談するようになって。「なんか出たぞ」っていうときも、彼に先に話して、わたしにも話して、「大人大人!」って乾杯を。

【川上】すごい!

【内田】ひとに話すとか驚かれますけどね。同居人の男友達もびっくりして、「それはマスターベーションしてることが前提のお祝いじゃん」って。でも、下に妹がいるんだから、TPOは考えてもらわないといけないしねえ。鍵のかかるような部屋じゃないので、素っ裸で寝ちゃったりかして、妹がトントン、ガチャ……「あっ(ドアを開める)……っていうこともあるでしょ(笑)?」

【内田】そうそう、『乳と卵』を読んでるとき、六年生の娘に初潮がきて。

【川上】「なったよ」って言ってきました?

【内田】はい。「母ちゃん始まっちゃった!」って。なんてタイムリーなんだろう(笑)。

【川上】ちゃんと言える家庭と言えない家庭の違いって何なんでしょうね。わたしは3年くらい隠しました。言えなかったんですよ。

【内田】わかったときも、「ああ、はれちゃった!」って感じ?

【川上】たぶん、1歳違いの姉より先に来てたんですよ。うちは6人家族が4畳と6畳に住んでて、プライベートが一切なかったんです。もちろんトイレは一個。セックス全般に対して特にタブー感も何もなかったんですけれど。

【内田】オープンでもなかった?

【川上】そう。共通に目に見えるものとしてトイレにナブキンがあるかどうかで、けっこう大きいですよ。うちの母は生理が軽かったのか面倒だったのか、置いてなかったんですよ。だから初潮のときはナブキンを獲得する冒険から始めなきゃいけなくて(笑)。でも子どももお金もないから……みんなお母さんに買って買ってもらうのか、どうしてんねやろ、と。

【内田】最初の何回かは隠たっていうひと、やっぱりいますよ。このあいた春日武彦さんとお会いしたときも、そんな話に。わたしも母に言ったとき、ちょっとからかうような反応をされたんですよ。失敗すると「あんたももう……」とか言って半笑する。それがすごく嫌で。

【川上】いまも覚えているショックなことがあって。下着が汚れちゃうと、いつもお風呂で洗ってたんです。それをいちど置きっぱなしにして学校に行っちゃって……。

【内田】知られちゃった?

【川上】「もう死んだほうがいいんじゃないか」ってくらいに。不思議ですよ。なんであんなふうに感じるのかな。『乳と卵』のナブキン裏返していうのも、実際のエピソードなんです。誰にも教えてもらえなかったから。

【内田】痛かったでしょう? でもうちの娘も、自分の妹には話さないんですよ。わたしに話して、それから自分の兄に話して……。

【川上】高校生のお兄ちゃんに?

【内田】うん。それから、いま父親役をやっている同居人に話して、それから女性スタッフに話して……さすがに6歳の弟には話してないんですけど、妹にも言ってないんですよ。

【川上】なんでだとか、聞かれました?

【内田】ちょっとからかうんですよ、その子が。

【川上】性的なことを?

【内田】そう、体毛が生えてきたころにお風呂ですれちがうと、「娘①ちゃん、髪の毛ついてるよ」とか言ってわざと言う(笑)。だから、そういうどこか話せないポイントが、川上さんの場合にもあったんでしょうね。

【川上】でも、さっき春菊さんの言ってらした、精通があったときに「おめでと〜」って言うのはいいですよ。女の子に対しては普通にあることだし。それとはまた違いますけど、性的な部分の隔離を無くしたいって友人がいて、例えば、トイレにはドアを付けない、とか実践してるひともあります(笑)。

【内田】中国だ、中国(笑)!

【川上】そこまでやっぱりいひとはいるんですよ。

【内田】でも、そういうひとは中国行っても抵抗ないよね。

【川上】中国、びっくりしましたけど、わたし。普通に新聞読んだりしてますもんね、開けたまま。さすがに北京空港には付いてましたけど、ちょっと離れた街行ったら、ぜんぜんない。

【内田】あたしそういうとこで生きて行けるかなあ……。

【川上】中国の小さい子どもって、ズボンの股のところかもともと開いてて、その辺で立ちながら排泄するんですよ。それで、お母さんが拭くかと思ったら拭かないんですよ。出したらそのまま清掃員がぱっときて拭き取る(笑)。

【内田】ズボンあってもお尻のところかハコッって開いてるのあるよね。ちょっとしゃがむとバツとお尻が出るの。

【川上】丸見えなんですよ、オムツもない。

【内田】わたしは中国には行ったことないんだけど、子どもが産まれたときに中国服をもらったことがあって。「開いてるよ!」とか思って縫い付けた(笑)。ここは日本だから縫い付けておこう、ってね(笑)。

【川上】春菊さんについて「すごくいいなあ」と感じられてしまうのは、さっき精通のお祝いの話で「普通」って言いましたけど、それがいわゆる「力が入っていない自然な普通」だからだっていう感じがします。

【内田】ただ、初潮のお祝いってというのは、戸籍制度とかの昔のころから考えると、女が売り物になったお祝いなんですよ。

【川上】嫁げるようになったということですね?

【内田】うん。そういうお祝いだからお赤飯まで炊くんですよ。男の子は大人になったお祝いってしないじゃん?

【川上】確かに。励ましはあっても。

【内田】わたしの勝手な考え方だけど、男の子は傷つけないようにしてしてるんじゃないかなって。大人にする手ほどきをして、大事に大事に、男の子を過剰に傷つけないようにしている気がする。でも、男の子の身体が大人になるのも、女の子の身体が大人になるのも……。

【川上】同じですよ。

【内田】だけど、男の子のお祝いは驚かれる。だから、わたしの思い込みじゃなくて、意外と正しいんじゃないかなーとかって思うんですよ。

【川上】わたしの女友達の大多数が言っているんですけど、春菊さんの描くセックスシーンを見てると台詞も構図もそのままのセックスがしなくなるんです。できればそのときだけ登場人物になりたくらいですよ。

【内田】嬉しい!

【川上】したくなりませんか?

【内田】自分で描いて? なりますね。

【川上】なるんですよえ……。わたしこんな気持ちになるマンガがほかにないんですよ。

【内田】じつは、さいきん困ってるんですよ。自分のはともかく、「まえはこれでそそれたのにな」っていうものが多くなってきた。でも、女性のエロもやるひとの話を聞いてると、AVでもレイプものはダメとか、こういうシーンがなきゃイヤとか趣味があって、変わっていくんですよ。「子どものときぐっきたセックスシーンはずっと残る」とか、あれ嘘ですよ(笑)。

【川上】変わらないと困りますよね(笑)。とくに好きな場面があるんです。『目を閉じて抱いて』で、「花房さん好き」ってぼろぼろ泣く、津也子さんって女のひとがいますよ。その2人のセックスシーンが絵も台詞もひっくり返るめものすごく好きで、拡大コピーしたことありますよ(笑)。

【内田】(笑)。

【川上】あと、擬音語がいいです。精液が出る音で「プッッ」っていうのを春菊さんの作品で初めて読んだんですよ。

【内田】山本直樹のマンガで、セックスしたあとに、女性器から精液がフローバックしてくるときに「プッッ」て音してたよ。

【川上】えー。そんな音しますか?

【内田】音が、っていうより、そういう感じなんですよ(笑)。

【川上】でも春菊さんの「プッッ」て(笑)。わたし、もう友達と感激して。いままで射精にあてられていた擬音語の、なんとという大げさ&歯がゆさ。

【内田】「どゅ!」みたいなね。

【川上】そうですよ。男の幻想というかなんか一大事みたいな感じがあったけど。ほんとに「プッッ」くらいなんですよ(笑)!

【内田】実際の音聞いてみたいですよ。マイクつけたひとの話は聞いたことがあります。

【川上】どこに(笑)?

【内田】ちんこに。だけど、そのマイクはちょっと高性能すぎたみたいで、精液が出てくるときに「ザアッ」て音が……。

【川上】あはははは(爆笑)!

【内田】性能よすぎた(笑)。

【川上】なんかのほってききたいな(笑)!

【内田】子ども産むときにマイクつけるんですよ。それとお腹のはり具合を見る機械がつくんだけど、マイクはずっとサアッって音がしてるんです。あれも水の音なんですって。それに近いんだろうと思うんだけど(笑)。

【川上】それと『キオミ』に、女のひとがイクときに「出るものはないんだけど、あたしたち絶対にか抜いてますと思うの」って描写があってその通りだと思いました。抜いてますよね、やっぱり。

【内田】抜けますよね。

【川上】こないだ、ある批評家でもあり哲学者でもある方とお話したときなぜか射精の話になって。

【内田】面白そうですね、哲学者(笑)。

【川上】男の場合は、射精するまえとしたあとだと考え方が激変するっていう。一個の問題について取り組んでも思考そのものが変わっちゃうんだとか。男女で喋っても比較できないから仕方ないんですけど。この違いは女性にも……。

【内田】うーん、でも多少はありますよね。

【川上】なんかを抜いてる感じっていうのは、しっくりきたんです。

内田春菊+川上未映子/中森明夫/南陀楼綾
景+内澤句子/池田雄一/大久秀憲/田本田
大彦/青木純一+倉敷茂/生田武志/山本動
物/大杉重男/上野昂志/斎藤美奈子/立花
種久/町田康一+中島らも/nanakikae/海猫
沢あさみ/福永信+法貴信也/東浩紀

¥0

[ゲスト]

内田春菊

Uchida Shungiku



〔内〕 あかね、クッキー焼いてきたの。動物の型抜きなんですけど、これが川上さんの。

〔川〕 きゃ! 歯だ! 写真撮りたい! ありがとうございます、じつはすごい緊張してたんです、今日。

〔内〕 あらあ……わたしも緊張してきました(笑)。

〔川〕 この連載で「次はどなた」とってとき、「せひ、内田さんとお会いしたい」って、ダメもどてお願いしたんです。春菊さんのマンガ、曲線の感じはもちろん大好きなんですけど、全体的にお医者さんでいったら外科医的なところを感じて。

〔内〕 怖そう?

〔川〕 でもお会いしてみたら、すごく産婦人科っぽいあなたかさというかしなやかさがあって……(笑)。でも色々な作品とのギャップがあるって言われませんか?

〔内〕 どうだろう。若いときはもっと違ったのかもかもしれませんね。でも、「こんな女じゃ勃たねえよ」みたいな本は、子どもの同級生のお母さんとかにはあげないようにしてます(笑)。

〔川〕 それはどうして?

〔内〕 やっぱり、びっくりされるかなって(笑)。「漫画サンデー」っていう、「飲む」「打つ」「買う」の油くさい男性誌に描いてたから、女性読者がいるなんて思ってなかったんです。けど、どこかへお芝居を見に行ったら、女の子から声かけられたんです。

〔川〕 それはいますよ!

〔内〕 そしたら、「ここに出てくる男がわたしの彼氏にそっくりなんです」って。

〔川〕 どんな彼氏(笑)!

〔内〕 「やめとけえっ」てね(笑)。

〔川〕 わたしも高校生のころから読んでました。「ファザーファッカー」とかやっぱりクラスで話題になったんですよ。で、5、6年前くらいから、出産と子育てを書かれた「私たちは繁殖している」を読み出して……あそこに出てくるご長男は、いまおいくつなんですか?

〔内〕 高校生です。

川上未映子の対談がぜ!!!

4